1945 年 8 月 6 日松重美人撮影写真を読み取る
～「広島原爆の撮影者」とともに～

西本　雅実（にしもと　まさみ）

元中国新聞記者／「ヒロシマ通信」研究会会員

1956　広島市生まれ
　80　中国新聞入社、2021年　退職
現在　「ヒロシマ通信」研究会（代表：宇吹暁）会員

原爆関連の主な取材
平和記念公園となった爆心地一帯の住民・勤務者・動員学徒ら2369人の死没状況を追った「遺影は語る」（1998～2000年）　被爆70年企画「伝えるヒロシマ」（2014～15年）など。

共著
『世界のヒバクシャ』（講談社、1991年、90年度日本新聞協会賞）
『検証ヒロシマ』『年表ヒロシマ－核時代50年の記録』（中国新聞社、1995年、同年度日本新聞協会賞）
『広島市被爆70年史』（広島市、2018年）など。

単著
『1945原爆と中国新聞』（2012年、中国新聞社）

連絡先　nishimoto731@gmail.com

はじめに

1945 年 8 月 6 日、米軍爆撃機「エノラ・ゲイ」が投じた史上初の原子爆弾は、広島市の上空約 600 メートルでさく裂し、七つの川が織りなすデルタの街は「崩れ墜つ　天地のまなか」にたたき込まれた[1]。

ひとたび核兵器が使われたら、人間はどうなるのか－。今を生きる私たちに未来にも警鐘を鳴らしているのが、「原爆記録写真」である。

広島原爆の惨禍をめぐる写真撮影は自ら被爆した人たちによって当日に始まった。甚大な被害を免れた陸軍船舶司令部の写真班員や、大阪や東京からも入った海軍の調査団、新聞・通信社のカメラマン・記者、ゆかりの人たち、研究者、記録映画製作班員らが続いた。

筆者は、中国新聞記者だった 2007 年、これら撮影者や遺族たちの証言や資料を追い、平和記念資料館（以下、原爆資料館と記載）などの収蔵写真などを基にして「原爆写真の撮影者たち」をまとめた[2]。以降も壊滅直後の写真を掘り起こして紙面で報じてきた。

ロシアがウクライナへ侵攻した昨年来、核兵器使用の可能性が公然と語られ、世界を震撼させている。日本では「核抑止」論にとどまらず「核共有」を唱える声も上がっている。

まさに今こそ、原爆記録写真を見つめ直すときではないだろうか。さらなる「全体像」を深めるため、原爆資料館へ新たに寄せられていたり、検証が進んだりした収蔵写真や、各報道機関の未公開写真にも当たり、全面的に洗い直した。

原爆の惨禍を1945年8月6日から12月末までに写真で記録した撮影者は(2023年10月末現在)、計70人・3団体（前回2007年、56人・1団体）を数え、少なくとも2945枚（同2571枚）を収め、2856枚の現存を確認した。うち2345枚（同1819枚）が原爆資料館で収蔵・保存されている。

人間が「天地のまなか」にたたきこまれた当日は、市民の惨状をデルタで唯一撮影した5枚をはじめ、原子雲を市内外から収めた27枚（うち24枚が現存)、炎上する市街地が3枚（組み写真)、被災者を乗せたトラックを市郊外で撮った1枚の計36枚が確認できた。

本稿では、1945年8月6日松重美人撮影写真を読み取り、同年末までの撮影者一覧を作成する。松重が撮り残した写真ネガフィルム原板5点は2021年3月26日に広島市重要有形文化財に指定された。御幸橋西詰めでの1・2枚目は、原爆資料館での展示や国内外の「原爆展」、被爆証言・講話のみならず、デジタル画像がさまざまな場でも使われている。

しかし、取り上げられることが多い分、風説や誤解もたびたび引用・紹介されている。自省を込めて記せば、メディアが「原爆神話」も広めてもいる。

未曾有の渦中の撮影状況をはじめ、写っている人たちについて一から追った。自らが名乗り出ていた、遺族が指摘していた、各資料から裏付けられた、御幸橋西詰め1・2枚目に写っているとみられるのは9人を数える。それぞれの詳細を確かめることができた。

被爆地ヒロシマの願いも伝える原爆記録写真には、顧みられていない変遷や証言、埋もれていた記録があった。「定説」を揺さぶる「疑問」も浮かび上がってきた。

午前8時15分、広島市翠町1551番地

松重美人（1913～2005年）は亡くなる前年の3月、人工透析の体調を押して広島市安佐南区の自宅で資料を携えた筆者を迎え入れ、こう語ったことがある[3]。

「生き運があったから撮れたと思います」。当時32歳の中国新聞社写真部員は、広島城本丸に構える中国軍管区司令部の報道班員でもあった。宇品線の路面電車が走る通りに面した「翠町1551番地」（南区西翠町1-2）に住み、妻スミヱ（1915～2007年）はそこで松重の妹夫婦が営む理髪店を手伝っていた。二つになって間もない長女と両親は愛媛県・大三島に疎開していた[4]。

1947年正月の松重美人家族。両親を中央に後列左端が本人、手前が妻や娘2人。修繕した自宅兼理髪店前で（長女提供）

1945年8月6日朝は、前夜から断続的に続いた警戒警報による司令部での待機が明け、いったん帰宅する。食事を済ませて自転車で出勤したが、「トイレに行きとうなり」御幸橋の手前で引き返した。広島城址の報道班員室にとどまっていたら、自宅から上流川町（中区胡町）の新聞社へ向かっていたら、助からなかっただろう。

「生き運があった」と述懐したゆえんだ。撮影

に欠かせないカメラも無事だった。

午前 8 時 15 分、自宅兼理髪店は、爆心地から南東約 2.8 キロとなる [5]。家屋の内部は散乱し、窓枠の一部は吹き飛ばされた。

「永かった大東亜戦争に終止符を告げた世紀の一閃（せん）が広島に落ちた。乳黄色の原子雲に包まれ、屋外に飛び出したものの何も見えない／広い道路には人影一人もなく、こわれたかわらや、木片が散乱している。はっと気がつき腰に手をやってみると写真機は腰にぶらさがっていた／当時私は『マミヤシックス』を愛用していた。カメラを焼かないにしても、体からはなしていたらこの写真は撮れていなかったのではないかとさえ思える」

撮影について松重が初めて書いた手記である（旧仮名遣いを改めた）。『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』に残る。連合国軍総司令部（GHQ）の占領統治が明けた 52 年の 8 月に出た写真集は、市民の無残なまでの姿を御幸橋西詰めで写した 1 枚目を見開きで、近づいて撮った 2 枚目と、被災者に囲まれた男性を収めた 5 枚目の計 3 枚を掲載した。併せて「八月六日の朝　キャメラマン松重美人」の一文を収め、筆者は「御幸橋々上のあの記録的写真撮影」と紹介している [6]。

国産のマミヤシックスは 40 年に発売が始まり「名機」と評された。距離計連動スプリングカメラは、操作性に優れ連写もこなせた。重さは 750 グラム [7]。中国新聞社の人事記録によると、松重は戦況が険しくなる 43 年の 2 月から写真部で働き、翌 44 年 5 月に採用され 11 月社員となった [8]。先輩部員らが召集され、軍報道班員も務めるカメラマンにとって、自らが購入したマミヤシックスは、掛け替えのない商売道具であり貴重な家財でもあった。

松重は 63 年に書いた「あるカメラマンの記憶」では、「散乱した壁土のなかから、上着や帽子、編上靴、そして私にとって何よりもだいじなカメラを掘り出した」とする [9]。70 年の「陸軍報道班員ヒロシマ日記」は、「あみあげ靴を掘り出し、新聞社と司令部へいく仕度をした。カメラ（私はとうじ、マミヤシックスを愛用していた）を点検してみたが、狂っていなかったことはたいへんうれしかった」と書き、掘り出したかどうかは判然としない [10]。

後述するように、松重の撮影写真は 70 年代に入って広く知られるようなる。証言活動に最期まで取り組み、メディアや継承に努める市民が取り上げ、カメラを「がれきから掘り出した」という話も散見されるようになる [11]。被爆 7 年後の手記「八月六日の朝」の記述を確かめた 2004 年こう答えた。「マミヤシックスは腰の革バンドにくくりつけていました」。カメラが実際がれきに埋まっていたら、撮影にはとても使えなかっただろう。

現存ネガ 5 点の撮影行程

電車通りの周辺が見えるようになると、自宅北側の広島地方専売局（南区皆実町の猫田記念体育館）前を通り、京橋川に架かる幅 22 メートル・長さ 162 メートルの御幸橋（中区千田町－南区皆実町）を渡り、右岸そばの文理科大グラウンド（中区の平野公園）辺りまで進んだ。しかし、火勢の勢いに阻まれて橋へ引き返す。手記「八月六日の朝」を再び引く。

「御幸橋交番の前には男とも女とも判断のつかない地獄から出てきたような、

髪も皮膚も焼けただれ背中、肩、腕に水袋をつけたように火傷がふくれあがった、この世の人間とは思えぬ者ばかりが何十人もうめき泣いたりしている。『ひどいことをしやがった』といいながら一枚写真を撮った。憤激と悲しみのうちに二枚目のシャッターを切るとき、涙でファインダーがくもっていたのをいまも脳裏のどこかにはっきりと記憶している。一息ついて時間を見たら十時半だった」[12]

想像を絶する惨状を前にして、真っ先に沸き上がった憤怒、自分は無事だったという申し訳なさ、しかし、新聞社・軍報道班カメラマンの務めは非情であっても果たさなくてはならない…。70年の手記では「自身が鬼畜にもひとしい冷酷な者にみられているようである／〈いま私はみなさんの死の苦しみにあるその姿を写真に撮るがゆるしてくださいよ〉と、相手には通じない謝罪をしながらシャッターを切った」と書く。被災撮影者らによる85年の座談会では「幸い師団司令部の腕章を付けていたので写すことができた。それがなかったら撮らなかったと思います」と率直に語っている[13]。

「涙でファインダーがくもった」。この記憶・証言は終生変わることはなかった。

ただ、松重の手記や証言、関連する記録をあらためて集めると、今は「午前11時すぎ頃」が「定説」である御幸橋西詰め1・2枚目や、5枚目の撮影時間は、変遷していた。詳しくみる前に、松重が代表を務めて81年に編さんした写真集『広島壊滅のとき』で自身が記載した時間に沿って、御幸橋から自宅に戻った3枚目以降の撮影行動をたどる[14]。

「午後2時頃」、窓枠やガラスが吹き飛ばされた自宅兼理髪店内を妻スミヱを入れて撮り、続いて窓枠越しに、電車通りを歩く男性と倒壊した東側の2階建て西消防署皆実出張所を収めた[15]。当時29歳の妻は身重だった。次女は翌46年2月に生まれ今も健在である。

さらに「午後4時すぎ頃」、広島地方専売局前の電車回り角で、被災者に囲まれて「罹災証明書」を書く宇品署員を収めた。この証明書があれば、食糧配給や列車の切符を手にすることができた。「8月6日」撮影現存ネガで最後の5枚目である。

自宅兼理髪店にはこの間、妻スミヱの姪が「ひぶくれ」で助けを求めに来ている。京橋川に架かる鶴見橋（中区鶴見町－南区比治山本町）一帯の建物疎開に学徒動員されて被爆。松重は「うちわであおいでやるのが精いっぱいだった」という[16]。

未曾有の事態に陥った中でも、松重はそれ以上に撮ろうとし、また撮ってもいた。

「（午後）二時半すぎ、どうでも中央部へ出てみようと、哀れな姿の行列を見るともなしに家の前にいたら」同じ翠町に住む政経部の高橋慶彦（当時22歳）が現れた。無事を互いに喜び、一緒に社を目指す。京橋川右岸の文理科大グラウンドから、竹屋地区を抜けて、流川筋を通り、全焼した本社に入った。編み上げ靴は灰にすっぽり埋まり、熱気と煙の充満で飛び出た。爆心地近く紙屋町では、焼けた電車の中で数十人の遺体が折り重なっていたのを目撃した。「自失から覚めたようにカメラに手をかけたが、目を開く生不動の形相にシャッターが切れなかった。結局、中央部では写真を一枚も写すことができなかった」[17]

「松重美人著」として2003年に出た『なみだのファインダー』には、「8月6

1945 年 8 月 6 日午前 9 時半ごろ～11 時ごろ、松重美人撮影御幸橋西詰め 1 枚目。爆心地から南東に約 2.2 キロ、千田町の動員先で被爆した女子学徒や近隣住民らが逃げてきたのに続き、宇品署は備蓄の食用油を千田派出所に運び、署員らが応急手当てをした（中国新聞社所蔵のネガ 5 点は 2021 年広島市重要有形文化財に指定。日本写真保存センター寄託を通じて、現在は国立映画アーカイブ相模原分館で保存されている）

1945 年 8 月 6 日午前 9 時半ごろ～11 時ごろ、御幸橋西詰め 2 枚目。手前の三角襟のセーラー服が阪本光子、左隣が同級生の松林節子、中央の男性が宇品署・藤川勝行、その右が光子の父・阪本儀三郎、さらに右の背中が沓木明、皮膚も焼けただれた女性の奥に見える帽子姿が同署・藤田徳夫とみられる（松重美人撮影／中国新聞社所蔵）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ～4 時すぎ　被災者に「罹災証明書」を書く宇品署の藤田徳夫。署の臨時本部を設けた広島地方専売局前の宇品線電停「皆実町三丁目」（現在の「皆実町六丁目」）の南側で撮られたとみられる（同）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ　爆心地から約 2.8 キロ、翠町 1551 番地の自宅兼理髪店内。奥に写るのが松重の妻スミヱ（同）

1945 年 8 月 6 日午後 2 時ごろ　窓枠も吹き飛んだ理髪店内から撮った宇品線の電車通りや、倒壊した西消防署皆実出張所

日に使用したフィルムは、5 枚だけです」とある[18]。しかし、後述するように、広島地裁へ 94 年に起こされた「著作権確認等請求訴訟」で、一方的に被告となった松重本人が「夜には、千田町の火災の状況を撮影した」と供述している[19]。では、そのネガはどうなったのか。現存ネガ 5 点以外にも、「フィルムを入れかえて四、五枚写しておいたが、あとは感光していたのか、現像はしたがかぶっていた」。被爆 7 年後の手記で言及していた。

松重は極限状況にあって、新聞社・軍報道班カメラマンの務めからシャッターを切った。同時に、人間としての感情や葛藤が屍(しかばね)の街を歩く中での撮影を押しとどめた。原爆を自ら体験した市井の視線から撮影して残したのが、現存するネガ（6 × 6 センチ判）5 点である。

変遷していた「撮影時間」

今は「午前 11 時すぎ頃」が「定説」の御幸橋 1・2 枚目の撮影時間は、掲載紙・誌をさかのぼると歳月とともに変遷していた。現行に落ち着くまでには 4 半世紀がすぎていた。

御幸橋西詰めの 2 枚が「世紀の記録写真　人類平和のスタート」の見出しで初公開されたのは、中国新聞が別会社で発行した『夕刊ひろしま』46 年 7 月 6 日付 2 面である[20]。「世紀の記録写真」の見出しを取りながら、本紙ではなく夕刊にとどめたのは、GHQ が前年 9 月 19 日に発した「プレス・コード」、民間検閲局（CCD）による検閲・監視を強く意識していたからだろう。

物資不足が続いた戦後の混乱期。紙面の印刷状態はいいとは言えない。しかし、逃げてきた御幸橋で倒れ込む姿や、皮膚も焼けただれた女性らしき人もはっきりと見える。右端を除きほぼ全構図で載せた、1 枚目の写真説明は「力盡(つ)きて地べたにくづをれたり仆(たお)れてゐる悽惨な情景（九時半ごろ御幸橋の西袂(たもと)で撮(うつ)す）」である。2 枚目は中央より右側に見える上記女性に焦点を当てトリミングした構図。掲載後、「夕刊ひろしま新聞社」の幹部ではなく、中国新聞社写真部員の松重と『夕刊ひろしま』整理部記者が呼び出された。

「この写真を複写してもらえないか、というような話しで、焼いて届けました。どうということも無かったですよ」と 91 年、堀場清子に答えている。原爆をめぐる表現に対する検閲ぶりを米メリーランド大所蔵の「プランゲ文庫」資料から掘り起こした堀場は、松重が向かった先は、上流川町（中区幟町）の広島中央放送局（NHK）に入っていた CCD 第 3 地区検閲局（福岡）の広島分局であったことを突き止めている[21]。松重はそれ以前の 88 年、「たいした小言もなく、御幸橋で撮影の写真を提供することで許された」と紙面掲載後に呼び出されてプリントを提出したことを自身が明かしてもいた[22]。

それを裏付ける紙面掲載とほぼ同じ構図のプリント 2 枚が、広島大放射線医科学研究所が所蔵する「米軍病理学研究所（AFIP）返還資料」にあった。米軍が接収した、原爆を落とされた側から撮った写真（広島関係は 1205 枚）や原爆死没者の病理標本が 73 年 5 月、前身の放射能医学研究所を窓口に返還された。返還時のプリントや資料を整理して収めた箱を開けると、撮影は「午前 9 時」とする英文キャプションが付いていた[23]。

「世紀の記録写真」御幸橋西詰め1・2枚目の撮影を、松重は提出時には「午前9時」とも説明していたのか。あらためて掲載紙・誌に戻ってみる。

御幸橋での惨状写真を中国新聞本紙が本格的に扱ったのは、見落としがない限り65年7月11日付だった。朝刊1頁を充てた特集連載「ヒロシマ二十年」第4回で1枚目が掲載されている。写真説明は「被爆4時間後の惨状／放射能を浴びた人人がつぎつぎに集まってきた／いまではこの人たちのほとんどは生きていない。松重中国新聞写真部員が写す。」。紙面で写真部員の名前がクレジット表記されるのは当時極めてまれだ[24]。

松重は戦後、肺結核を煩い体力も必要な写真部を54年に離れ、1年半に及ぶ休職・闘病から内勤の校閲部を経て、ようやく63年古巣に復帰したが65年8月に事業局へ異動となる。満56歳を迎えた69年に定年退職した。

撮影が「午前11時すぎ」と、いわば統一されていくのは70年代に入ってからだ。

原爆資料館の小堺吉光が6年がかりで担当した、広島市71年発行の『広島原爆戦災誌』全5巻。その第1巻総説編は、扉ページで1・2枚目と5枚目を続けて収めた。撮影は1枚目を「午前11時過ぎごろ」、2枚目を「午前11時ごろ」として、5枚目は「午後2時ごろ／宇品署の藤田警察官が、被災者に罹災証明書を書いて渡した」と説明。クレジットはいずれも「松重美人　撮影」である。ネガは松重が当時は旭町（南区）の自宅で保管していた。

73年の「AFIP返還資料」を基に、中国新聞社が急きょ編集して同年8月に発行した『原爆の記録ヒロシマ－米国返還資料から』は、松重「8月6日」撮影の5枚すべてを初めて収録するが時間は入れていない。御幸橋西詰めの2枚は、「返還資料」に含まれていた松重提出のプリントではない。松重所蔵ネガから焼いたとみられる5枚を載せて、残り3枚は、いずれも「この写真は返還資料には含まれていない」と注釈を付けて紹介した。

同じ73年8月に出た、仁科記念財団編さんの『原子爆弾』で収録された1枚目は撮影を「午前11時」と記載し、松重の談話を添えている。2枚目は時間を入れていない。写真説明の作成は、学術研究会議の「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に同行して壊滅の広島・長崎へ入った原爆記録映画の製作者だった相原秀次（本名・秀二）が当たっている[25]。

「人類が核時代に踏み入ってから三十年たった今日、広島・長崎の体験はより一層その深い意味においてとらえられなければならない」。中国新聞社は『ヒロシマの記録－被爆30年写真集』を発行。撮影1枚目は「午前十一時過ぎ」、2枚目を「午前十一時ごろ」、5枚目を「午後二時ごろ」と説明した。被爆35年、40年、50年の各写真集もこれを踏襲する。

被爆30年の75年夏には、広島県・市、NHK中国本部、中国新聞社の4者実行委員会による「ヒロシマ・原爆の記録展」が札幌、仙台、東京、大阪、名古屋の順で開かれた。御幸橋西詰めの惨状や「AFIP返還資料」のパネル写真、市民が描いた「原爆の絵」、実物資料が反響を呼び、5会場で約22万6千人が入場する。「原爆展」は市長2期目で同年1月に死去した山田節男が訴えていた。広島市にとって地元以外で主催する初の展示となった。

81年、松重は代表を務めた「広島原爆被災撮影者の会」が出した『広島壊滅のとき』で、御幸橋西詰め1・2枚目の撮影は「午前11時すぎ頃」と自らの筆記

で結論付ける。5枚目は「午後2時ごろ」ではなく「午後4時すぎ頃」とした。同会は、松重や中国軍管区司令部報道班員でもあった岸田貢宜（1916～88年）らが78年に発起人となって発足。地元の計20人が未発表を含めて寄せた285点を収録し、2000部を発行した[26]。

御幸橋西詰めで市民の惨状を撮った2枚の写真は、「8月6日午前11時すぎ撮影」が定着する。相原秀次が説明を手掛けた81年の『写真集原爆をみつめる』[27]や、東京都写真美術館が95年に開いた「核－半減期」展[28]は、1・2枚目とも「午前11時すぎ」だ。

筆者自身、『広島壊滅のとき』に重きを置いてきた。2004年「ヒロシマの記録－原爆・平和写真データベース化」と題した特集[29]で松重「8月6日」撮影全5カットの紙面掲載や、21年3月にネガの広島市重要有形文化財指定に伴う特集でも、撮影時間は「定説」を踏まえた。日本写真保存センター（東京）が22年6月に「写真原版データベース」で公開を始めた「松重美人撮影」ネガ13点（うち45年末まで10点）の時間・場所・発表媒体などを退職後に作成した際も、記者時代の取材を基にした。しかし、並行して進めていた今回の調査を踏まえると、「定説」は本当なのだろうかと疑問が膨らんできた。

御幸橋西詰めでの撮影は「九時半ごろ」だったのか、撮影に「一息ついてみたら十時半」となっていたのか、「午前11時すぎ頃」がより正確なのか。違いはそれほどないとみられるかしれない。松重の撮影は極限状況下でなされた。腕時計はしていたが時間を書き留める余裕など、とうてい持ちようがなかったからだ。

しかし、「私が写っている」と名乗り出た人たちの行動や、御幸橋での救護をめぐる記録を掘り起こしていくと、撮影は今の「定説」より早かった可能性がぬぐえない。なぜなら、松重自身が「一息ついて」の後を書き残している。「時間が経（た）つにしたがって負傷者は数多くなり／橋上の両側に牛肉をならべたようにずらり横たわり、水をくれ水をくれとうめき苦しんでいる」地獄絵のような光景が広がり続いた。その始まりを、私たちは御幸橋西詰めで写された1・2枚目で見知ったつもりになっているかもしれないからだ。

名乗り出た元女子学徒

「確かに私の後ろ姿です」。河内光子（1931～2018年）は1973年6月23日、「ヒロシマ・ナガサキ返還被爆資料展」を開催中の平和記念館（原爆資料館東館）を訪れ、御幸橋西詰めの惨状写真に自身がいることを明かした。新聞・放送局のカメラが取り囲んだ。

資料展は、米国から前月28年ぶりに戻ってきた返還資料群の中から写真134枚（米軍撮影のカラー29枚を含む）をパネル展示した。被爆地の市民も大半が初めて目にする原爆記録写真とあって、地元のみならず全国的にも注目を集めた。6月16日～25日の期間中、入場者は8万人を超える。廃虚の本通を歩く少年、熱傷の跡を逓信病院で撮られたカスリの若い女性…。計7人が「自分が写っている」と名乗り出た。

旧姓阪本光子は広島女子商業学校2年生だった。千田町1丁目（中区）の広島貯金支局に動員されて支局2階にいた。「Bちゃんが来とるよ」。窓からB29の

機影が見え、仲間に声がけしたが、自身は気にもとめず机についた。そこで吹き飛ばされた。爆心地から南東に約1.6キロ。押されるように階段を降りて電車道に出た。掃除のおばさんは既に死んでいた。

阪本儀三郎（次男提供）

「光子はおらんか！」。阪本儀三郎（1890～1966年）の声がした。東千田町の関西病院で修理仕事をしていた大工の父が現れた。声を聞かなければ見分けがつかないほどやけどした父を伴い、同級生との計7人で避難する。電車道沿いに市役所方面へ向かったが、「髪の毛は逆立ち、皮膚はずるむげ」の人たちが来るのを見て立ちすくむ。南に転じ、広島工業専門学校（千田町3丁目）から修道中（南千田町）へと逃げた。地面は熱く、路上の散乱物で足は傷つく。はだしだった。土手に落ちていたズックをはいて、御幸橋へ向かった。

御幸橋西詰め2枚目、中央の背の高い男性の後ろに立つ「三角襟のセーラー服」が阪本光子であり、男性の右肩越しに見える頭髪も皮膚も焼かれていたのが父の阪本儀三郎である。

河内は名乗り出た73年、「下関のいとこからもらった三角襟に黒い一本線が入った白いセーラー服」は「絶対私です」と会場に展示された2枚目のパネル写真前で指さしてしている。

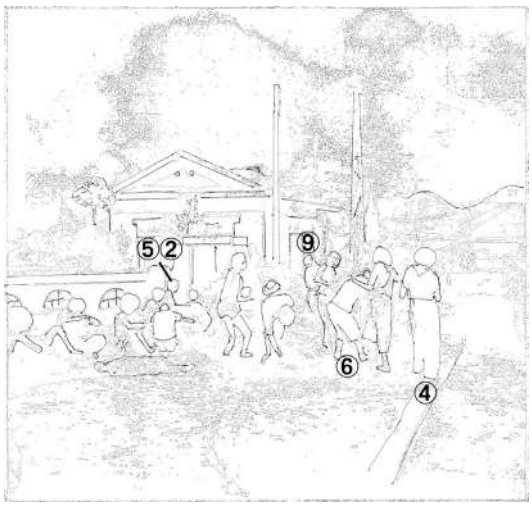
その時のテレビ映像も残っている[30]。一方、父が写っていることは明かしていない。

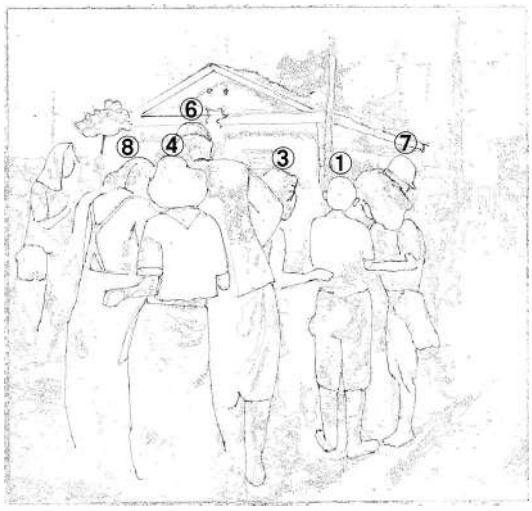
それ以降は、家族を世間の目から守るためにもメディアに出ることは避けた。NHK広島放送局が原爆資料館の展示品に焦点を当て、吉永小百合が語りを務めた82年8月6日全国放送の『きみはヒロシマを見たか』で応じていたが、匿名で御幸橋を歩く後ろ姿。同名の書籍化では「K・M」で証言し、阪本姓を伏せて「父儀三郎」も写っていることを明かす。名乗り出たのは父の形見ともなった写真が欲しかったからだという[31]。

ようやく筆者は2007年に取材がかなった。中区の自宅を訪ね、御幸橋での写真撮影にも応じてくれた。「橋に近づくと負傷者が列をつくり、何か薬をつけてもらっているのが見えた。『お父ちゃん、塗ってもらおうよ』と言って並びました。そこを撮られたんです」。三角襟の後ろ姿が右側に写る1枚目にはこう語った。「それはむごかったですよ。子どもを両手に抱えた、この女性は名前を叫んで気が狂ったみたいにぐるぐる回っていました」

河内は、旧厚生省が95年の被爆者実態調査で初めて求めた体験記（自由記述欄）で御幸橋後の避難も書いていた。「川岸に降り汐の引くのを待って歩いて吉島に上陸、伝馬船で江波の一軒茶屋に渡して貰（もら）い、やっと人心地がついた心境でした」[32]。元安川と太田川（本川）を何とか渡って舟入川口町（中区舟入南）に上がった。女子商の同級生も一緒だった。自宅は住吉橋近く舟入幸町にあった。母フミ（当時44歳）は焼け死んでいた。

今回、佐伯区在住の8歳違いの弟に会うことができた。「おやじも自分が写っているのは早くから知っていましたよ。姉が独身だった頃に気づいて報告すると『口外するなよ』と言ったのをそばで聞きました」「姉には母親代わりをしてもらっ





表：1945 年 8 月 6 日御幸橋西詰めで写っているとみられる人たち

	名前（年齢）	所属・職業	被爆場所
①	沓木明（12）	広島市立中学校 1 年	小網町の建物疎開作業現場
②	先小山勝（33）	旅館業	千田町 3 丁目の自宅
③	阪本儀三郎（55）	大工	東千田町の関西病院
④	阪本光子（13）	広島女子商業学校 2 年	千田町 1 丁目の広島貯金支局
⑤	坪井直（20）	広島工業専門学校 3 年	富士見町の路上
⑥	藤川勝行（29）	宇品署巡査部長	皆実町 1 丁目の自宅
⑦	藤田徳夫（28）	宇品署巡査	宇品町の宇品署
⑧	松林節子（13）	広島女子商業学校 2 年	千田町 1 丁目の広島貯金支局
⑨	松林保太郎（54）	医師	千田町 2 丁目の医院兼自宅
⑩	松重美人（32）	中国新聞社写真部員兼中国軍管区司令部報道班員	翠町の自宅兼理髪店

（注記）御幸橋西詰め 1・2 枚目に写っているとみられる 9 人と撮影者松重の被爆場所を 1945 年 8 月 11 日米軍撮影写真地図や、イラストに番号で示した。

N
W
E
S
中国軍管区
司令部
爆心地
中国新聞社
市役所
文理科大
グラウンド
御幸橋
地方専売局
①
②
③
④⑧
⑤
⑥
⑦
⑨
⑩
0 200 400 600 800 1000 m
1945年8月11日米軍撮影写真地図 竹崎嘉彦調製

1944 年 1 月、広島師範学校男子部付属国民学校に通っていた頃の沓木明（前列左端）。後列左端が父良之

同　明は耳の大きな少年だった（良之の孫提供）

たけれど、原爆のことを人前でよう話すなあと思いました。私はなれません」。母を奪われ自身は舟入国民学校で被爆した日々からを思い起こさせる御幸橋西詰めの惨状写真に複雑な思いを吐露した。

遺骨すら不明の男子学徒

「一年三組故沓木明父　沓木良之」の手記「真如の月やどる」は、息子が御幸橋までたどり着いていたのを知った驚きから始まる[33]。

「昭和四十三年六月五日、広島県動員学徒犠牲者の会発行の学徒誌が、届けられた。家内はむさぼるように頁（ページ）をくった。突如悲痛な声で『明がこゝに居ます』と呼んだ。自分も飛び込んだ」。同会が 1968 年に発行した『動員学徒誌』巻頭で「救護を乞う学徒の一隊」の説明による御幸橋西詰め 2 枚目の写真を見て、父母は「明だ」と確信する。耳の大きな息子の後ろ姿が鮮明に写っていた。中央に立つ背の高い男性の右 2 人目に当たる。

沓木明（当時 12 歳）は、広島市立中学校（基町高）1 年生だった。小網町（中区）一帯の建物疎開作業に出て遺骨すら不明となった。父良之（1893～1979 年）と母ヒサ（1900～1987 年）は「あの日」から末っ子で 6 男の消息を追い求めた。一家は当時、大正橋近くの段原末広町（南区）に住んでいた[34]。

良之は「明の姿を見出したる上は、此（こ）の写真を手がかりとして、当時の模様を探し求めんと」学徒誌の資料収集者を訪ねる。原爆資料館の小堺吉光（『広島原爆戦災誌』執筆者）から撮影者の松重と会い、市内で自動車工業会社を営む「藤田徳夫」にたどり着く。

「当時、藤田氏Ⓣは千田町派出所の警官で、原爆の投下直後、宇品運輸部にゆき、食料油を貰（もら）って来て、同僚の藤川Ⓕ警官と共に、のがれて来た学徒等のシャツ等をちぎって、之に食用油をふくませて、ビチャビチャに塗っている所だとのこと。手当をした学徒其（そ）の外（ほか）、個人については全然記憶はないが、こゝ迄（まで）あえぎあえぎたどりつき、油を塗ってもらって少しはらくになったのか『ありがとう』と礼をのべて引きさがったものもあり、其のそのむごたらしい姿は、今に至りても胸のつまる思いがする」

直接に藤田から聞き取った内容を書き残している。NHK 総合『ひろしま、人、

時、所』で68年8月23日放送の「動員学徒を悼む」座談会に、県動員学徒犠牲者の会関係者と出席し、藤田は手記に表したのと同様の話をしたという[35]。

原爆で遺骨すら不明となった息子への尽きせぬ思いからの探求はさらに続いていた。

「閃光いまも」と題した番組が73年8月5日深夜、『NNNドキュメント'73』で全国放送される。「返還被爆資料展」会場で「私です」と名乗り出た当日の河内も収めた、広島テレビの制作。25分番組の終盤、「耳の大きい子をわが子と信じる老夫婦がいる」とのナレーションが流れ、母ヒサが河内を自宅に訪ねて明の様子を少しでも確かめようとする。良之も後日訪ねた。「自分が生きようともがくだけで、何の記憶もなく怖いばかりで、写真もあまり見たくありません」。御幸橋での惨状をめぐる話を聞き、河内の左隣に写っているのは一緒に逃げた女子商同級生と知った。

良之の手記に2021年秋初めて接した筆者は不明を恥じるしかなかった。

77年に書いていた手記は、御幸橋西詰め2枚目を載せて後ろ姿の人たちに左から「Ⓜ（同級生の旧姓を指す）Ⓚ（河内光子）Ⓕ（藤川）Ⓐ（沓木明）Ⓣ（藤田徳夫）」のイニシャルを入れていた。河内の父阪本儀三郎は、「藤川」の右肩越しに見えるやけどの男性だが記していない。河内が話さなかったのか、良之が表記を控えたのか…。いずれにしろ、市民の惨状を捉えた御幸橋西詰めの写真で5人の名前（姓のみの「藤川」を含む）を、儀三郎を含めれば、写っているとみられる6人を亡き明の父がほぼ同定していた。

沓木良之は、市立第一高等女学校（舟入高）で音楽担当の教諭だった。現在の平和記念公園南側に当たる一帯での建物疎開作業に出た1・2年生は全滅し、最多の生徒犠牲者が出た。「広島市女遺族会」57年発行の『流灯』は良之の日記抄を収録している。「八月八日　昨日市女生徒を求めて、材木町をさまよったが、一名の生存者に会えず本日早朝登校して、疎開作業に出動した学徒及七教師全員死亡（但（ただ）し生徒三名が収容中）の由（よし）悲痛の極みである。死体の火葬はじまる」。息子のみならず教え子も捜し回っていたのだ。

東区の専光寺にある沓木家の墓誌には「昭和二十年八月六日学徒動員原爆死明」と刻まれている。

食用油を塗る2人の宇品署員

沓木良之の手記にも出てきた、藤田徳夫（1917〜93年）は、松重1945年8月6日撮影の5枚目に横顔がはっきりと写る。血がにじむ布を頭に巻いて被災者に「罹災証明書」を書く宇品署員である。「返還被爆資料展」が開かれた73年、「あの時、証明書を渡せたのは百人足らずだったと思います。証明書を書くより、被災者の手当てをする方が先でしたから」と、食用油をやけどした被災者に塗ったことを語っている[36]。

その藤田と同僚の「藤川」が2枚目に写る、御幸橋西詰めの千田派出所前で救護に当たる警察官なのか。食用油は未曾有の混乱の中でいつ、どこから持ってきたのだろうか。

宇品署長だった須沢良隆が被爆13年後の58年、当時の東警察署長や宇品警防

団関係者らと直後の活動を語った座談会で明かしていた[37]。速記の全文が残っている。

須沢は署そばの官舎で被爆し、署員が運転する車で午前8時40分ごろ、鷹野橋まで入った後の行動をこう証言する。「以前に広島三署の署長で救急用の食用油をビチクしておこうというので当時、西が60カン、東が40カンかな、宇品が25カンか、食用油をチョ蔵して地下に埋設していたのですが、之(これ)を一つほり出してこようというので自動車で千田の交番まで持って来たのが、おそらく9時頃から10時の間でした。そこで、やけどの応急手当てとして油を塗ってやった／巻ゲートルをはいた巡査が油をつけてやっているのが写真に出ております。あれは千田町の交番に間違いありません」[38]

食用油は午前9時から10時の間に千田派出所へ届き、署員が塗っていたのだ。翌46年初掲載の『夕刊ひろしま』写真説明がいう1枚目は「九時半ごろ御幸橋の西袂で撮す」が肯ける。松重は「この1枚目のシャッターを切るまでに約30分はためらいました」と書いたり話したりしている[39]。食用油の到着が10時だったとしても2枚目を撮り終え、「一息ついて時間をみたら十時半だった」という52年手記の撮影行動と不自然さはないだろう。

「定説」の「午前11時すぎ頃」よりやはり早い撮影だったのではないか。だからと言って、原爆による人間の惨禍を御幸橋西詰めで捉えた写真が持つ意味が減じるわけではない。代表的な原爆記録写真の内実をさらに知るため、油を塗る2人の宇品署員を追う。

ただ、その前に元署長の証言で見過ごせない点を押さえておく。写真1枚目は負傷者の向こう側で腰を屈め、2枚目では頭から足下までの後ろ姿が見える背の高い男性は、「巻ゲートル」ではなく長靴を履いている。座談会での言い間違えなのか、写真の記憶がおぼろげだったのか。藤田の横顔がはっきりと写る5枚目をネガから高精細化したデジタル画像で確認すると、足元は手前の自転車に遮られてはいるが、長靴を履いている。

藤田は「8月6日」朝、泊まり明けの宇品署（南区宇品海岸）で被爆した。爆心地から約4.6キロ、飛んできたガラス片で額を切った。妻子や両親と千田町3丁目で暮らす地元住民でもあった。1歳2カ月で被爆した長男が今も家族と住む。

「おやじは原爆の話は家ではほとんどしなかったですね」。戦後はトラックの荷台などを造る実家の「藤田自動車工業」を49年に継ぎ死去直前まで働いたという。「そういえば、仏さんに参らせてください、と昔の同僚が来られたことがあった。おやじと一緒に油を塗ったが、すぐのうなった、と私の知らない話をした。『藤川』と言ったと思う」。会社敷地をマンションに建て替えた97年の頃。とはいえ、沓木良之が68年に藤田から聞き取り写真2枚目に「Ⓣ」と入れた、やけどを負った女性の向こう側に帽子姿が見えるだけでは、父「徳夫」と断定しようもなかった。

藤田は家業から戦前では珍しく車の運転免許を持っていた。宇品署保管の油20かんを宇品町と皆実町の各派出所には「五かんずつ置いて、千田へは十かんほど持ち帰って御幸橋のところで塗ってあげた」とゆかりの千田町住民との座談会で76年に語っていた[40]。

「藤川」のフルネームは、広島県警友会が89年に133編を収めて発行していた『原爆回想録』から分かった。「私は市内皆実町一丁目の自宅で原爆に遭い、窓硝

子で頭に怪我をしました」。それでも宇品署巡査部長は、皆実派出所に出向き、市中心部へ向かう署長須沢に随行して御幸橋を渡った[41]。

「私たちは、派出所の前で消毒剤や火傷用の油などを負傷者に塗って包帯をしていましたが、何分にも多数の負傷者のことで無我夢中のうちに時間がたち、一八リットル入りの油かんはたちまちにしてなくなりました。中にはその場で倒れ込み動けなくなる者もあり手の施しようもありませんでした」[42]。写真2枚目、右側の負傷者足下には一斗缶のような器も写っている。

藤川勝行（長女提供）

藤川勝行（1915～2001年）は当時、身重の妻と2歳を前にした娘との3人家族。長女は、母と広島駅へ向かう途中の的場町（南区）で被爆していた。安芸区の自宅で御幸橋西詰め2枚目を手にすると、中央に写る負傷者に囲まれた背の高い警察官に視線を落とした。

「頭の形や後ろ姿は似ています。父は背が高く、イメージ的には父のような気がします」。同席した夫も「私は身長163センチですが、それより高かった」といい、パソコンに収めていた生前の写真を見せてくれた。晩年も細身で長身だった。藤川は70年に警視正で退職し、安佐南区で暮らした。広島にいれば、御幸橋西詰めの惨状写真を新聞・テレビで目にする機会も多かったはず。しかし、長女夫婦は、生前の藤川から「8月6日」負傷者に油を塗った、写真に撮られたという話は聞いたことはないという。

「午後2時ごろ」または「午後4時すぎ頃」

1945年当時の宇品署は警察官50人とその他職員5人が配属されていた。爆心地から約4.6キロの距離とはいえ、死者2人、重傷5人、軽傷14人をみる[43]。千田派出所勤務の巡査部長金広満は、宇品海岸通りの食堂で閃光とすさまじい爆音に続き、どす黒い煙が市上空に上がるのを見て、取るものも取りあえず自転車で向かった。

「千田派出所に飛び込むと、窓枠、硝子の飛散した中で藤田巡査が一人頭に白い包帯姿で立っていました。私は御幸橋に立ちはだかり、警笛を吹き鳴らし、声を張り上げ」「『電車道を行けば病院があるんだ』『歩け、歩くんだ』と怒鳴る以外に方法はありませんでした」

『原爆回想録』に寄せていた一文である[44]。また、金広は被爆13年後の座談会にも出席していた。そこでは、派出所として「6、7名集まらなければならないものが3名くらいしか集まっていない状況で」と語っていた。新任の派出所勤務者2人のうち1人は広島電鉄本社近くで重傷にあり、もう一人は捜したが見つからなかったという。

署長だった須沢は58年の座談会で、混乱を極めた直後をこうも証言していた。「（午前）十時半頃、私達の宇品警察本部といいますか、私のおる所を今の専売公社の前にガソリンスタンドがありますが、あそこで午後三時頃までおって…」。59年の『西日本住宅詳細図』で確かめると、ガソリンスタンドは現在の宇品線

電停「皆実町六丁目」（45年時の電停名は「皆実町三丁目」）の南側にあった。そこで「罹災証明書」を書く頭に包帯を巻いた藤田徳夫を撮った5枚目も、「定説」より早い午後3時までに撮っていたのだろうか。

既に述べたように、71年発行の『広島原爆戦災誌』第1巻に載った5枚目の撮影時間は「午後2時ごろ」である。説明文は「皆実町の広島専売局前の電車停留所角において、負傷した宇品署の藤田警察官が、被爆者に罹災証明署を書いて渡した」と場所や人物も特定している。松重は写真を提供していた。しかも、御幸橋西詰め1枚目の写真が、「著者が自分のカメラ（コダック・レタッチ）で撮影した」とする書籍が翌72年に東京から出版され、被爆資料を研究する市民グループが抗議文を送った際にこう語っていた。「原爆投下後二時間余りたった十時半ごろ撮影した。負傷した警官が証明書を書いている写真など一連の写真は五コマあり、最後のコマは自宅内の妻も写っている」[45]

窓枠も吹き飛んだ自宅兼理髪店のさまを妻スミエを入れて撮ったのは「午後2時ごろ」。この撮影時間は一貫して変わっていない。72年の証言をそのまま受け止めると、5枚目はもっと早い時間帯にとどまらず、撮影ネガの順番も「定説」と違ってくる。松重は81年発行の『広島壊滅のとき』で5枚目を「午後4時すぎ頃撮影」とし、晩年には「午後5時ごろ」「午後5時半頃」と書いたり話したりするようにもなった。しかし、この程度の時間のばらつきは日常であっても珍しくはないだろう。

原爆被爆という未曾有の体験が、時間の記憶も吹き飛ばしたと言えるのではないだろうか。思い出そうとしてもかき消されていたため、あいまいになる。御幸橋西詰めの惨状写真をめぐる証言では、後ろ頭の同じ人物を指して2人が「私です」と名乗り出ていた。

欄干にもたれかかる旅館業者

「『御幸橋の被爆写真に私が…』」「三原の先小山さん名乗り　後ろ姿確認」。中国新聞1985年9月12日付は、この見出しで、松重撮影1枚目の御幸橋欄干の支柱に横向きにもたれかかる男性の姿に矢印を入れた写真を紙面3段で載せて、三原市に住む73歳の「先小山勝さん」が「自分の姿が写っている」と名乗り出たことを報じた。

記事は、「自分に間違いない」理由として、「午前九時から午後一時ごろまで」座っていてカメラを持った人が撮影していたのを覚えているほか①頭とあごの形がよく似ている。後頭部に白っぽく写っているのは幼児期の傷跡②当日着ていた薄茶色の開きんシャツによく似ている－との証言を紹介。当時、御幸橋から約200メートル離れた千田町で旅館を経営し、居間で新聞を読んでいる最中に被爆し頭や腹などにけがをしたが、見通しがよくなり目印になりやすい千田派出所の前まで歩き、つかいに出ていた妻の帰りを待っていた、とある。

御幸橋西詰めの写真は、当時を思い出すのが嫌でじっくりと見たことはなかったが被爆40年の8月末、NHKニュースで写真が写され、「『あれから四十年も生きているあかしに』と中国新聞社などを通じて松重さんから写真を郵送してもらい確認した」という。松重の談話も付けている。「私が当日写したのは五枚だが、

写った人が名乗り出たのは先小山さんで二人目。ここにおられた方はなくなられたと思っていたが、生きておられたとは胸が熱くなります」と話していた。

松重がいう1人目は、73年の「被爆返還資料展」で名乗り出た河内光子のことだろう。松重は既に退職していたが、河内に会い写真を提供した。藤田徳夫とは前年の84年御幸橋架け替え工事の着工で一緒に取材に応じているが、河内との出会いが記憶に勝り「2人目」としたのかもしれない。実は、藤田は中国新聞65年の特集連載「ヒロシマ二十年」の「あの日と私」という小欄でいち早く名乗り出ていた[46]。

「焼けただれた動員女学生、欄干にうずくまる被爆者の群れ…代表的な原爆写真の一枚とされている写真の中で、手当てをしているのが私なのです／みんな服がボロボロになっているので、油をつける布はいりません。負傷者の服を破っては油をつけました」。日本新聞協会賞を受賞した一連の「ヒロシマ20年報道」は書籍化されたが、シリーズ「あの日と私」は収められていない。筆者も今回初めて気づいた。

先小山勝（1919～90年）は、御幸橋西詰めで写っているのは「自分」と名乗り出た、本来は健在3人目であった。ところが後述するように、メディアによって、いわば消し去られる。「これが私ですよ」と後に名乗った被爆者が著名になるに連れて、その人物が欄干の支柱にもたれかかっている被爆直後の姿だとみなされる。

記事は言及していないが、先小山が、御幸橋西詰めで待っていた、「つかいに出ていた」妻の久子（当時24歳）は45年8月31日に死去していた。高坂村（三原市）出身の先小山は、台湾で警察官をしたが、兄が堀川町（中区）で旅館「田中屋」を営んでいたことから移り住む[47]。旧豊田郡出身の久子と40年に結婚。市による爆心地から2キロ内の「世帯復元」地図で確かめると、千田町3丁目の御幸橋西詰め近くに「先小山」が記載されていた[48]。

「妻が帰ってこないので捜し回り、ようやく見つけたそうです。戦後はこちらに戻って役場勤めなどをしたが、私が物心ついたときも寝たり起きたり。名乗り出た新聞記事がきっかけで地元の小学校に呼ばれて話をしたこともあります」。先小山が再婚して50年に生まれた息子はそう話し、「なぜ、今さら」と逆に問いかけてきた。欄干の支柱にもたれているのは、別の男性になっていることは全く知らなかった。

欄干にもたれかかる工専生

「今は被爆者の世話役　御幸橋に写真残る　48年後の坪井さん」。中国新聞1993年8月7日付は、この見出しを付けて、広島県原爆被害者団体協議会（理事長・森滝市郎）の事務局入りした男性が、「これが私ですよ」と御幸橋西詰め1枚目の写真セラミックパネル前に立った姿と半生を報じた。パネルは御幸橋の掛け替え工事（幅35メートル、長さ156メートル）が完工した90年に設置されていた。「原爆の日」翌日の第2社会面トップ記事。

坪井直（1925～2021年）である。後に、日本原水爆被害者団体協議会代表委員を2000年から最期まで務めた。16年5月27日、現職の米大統領で初めて広

島を訪れて平和記念公園でスピーチをしたバラク・オバマに、「その事実（原爆投下）はあった。我々は未来に行かんといけん」とオバマ自身が 09 年プラハで提唱した「核兵器のない世界」を促した。名乗り出たのは、森滝ら亡き後にヒロシマの「顔」として知られる以前である。

広島工業専門学校（広島大工学部）3 年生だった坪井は、爆心地から約 1.2 キロの富士見町（中区）を歩いていて被爆した。似島の臨時野戦病院へ音戸町（呉市）から捜しに入った母が連れ帰って懸命な介抱を続け、一命を取り留めた。教師となり 60 年からは広島市内の中学で教え、毎年 1 学期最後の授業では自らの被爆体験を伝える。翠町中（南区）に在職していた 75 年、被爆教師 5 人による座談会でも御幸橋へ逃げたことを語っていた。

意識を取り戻して、「十分間は火のシャツを着て歩いていたのです。皆さん考えられるでしょうかね。それから私は逃げていくのですが、ちょうど御幸橋のふもとに避難場所ができていましたが、そこには何千人という人がいました。私もそこにたどり着いたのです。学校はもうすぐ目の前でしたが、私はもう自分で歩くことができなくなりました／いつ死ぬるかを考えていただけでした。そこで小石を拾って歩道の上に自分の名前を書いて…何かこの世に残したかったのです」[49]

93 年記事は、「『坪井ここに死す』と石で歩道に刻んだ」そのころ、松重が「シャッターを押した」とする。坪井が 1 枚目の写真パネル前で「指さした先に、後ろ姿の男性が写っていた」というが、どの人物かまでは記していない。欄干の支柱にもたれかかる男性と報じるのは 2011 年。河内光子の証言を原爆資料館ピースボランティアが聞き取りまとめた同年 2 月 19 日の出版記念会で、坪井と河内の再会を報じた記事で、1 枚目の写真をイラストにして支柱によりかかる男性に「坪井直さん」と入れた[50]。自紙が「先小山さん」と写真に矢印を入れて報じていたことは調べなかったのだろう、全く顧みていない。坪井も同年 11 月の「谷本清平和賞」の受賞で御幸橋 1 枚目の写真を掲げて講演に臨んだ。

放送局は映像が必須なだけに坪井の活動や半生に焦点を当てると、御幸橋西詰め 1 枚目の写真で欄干の支柱にもたれかかる姿が写っていると紹介していく。被爆 70 年の「8 月 6 日」に放送された NHK スペシャルは、御幸橋西詰め 1・2 枚目の写真を CG 化して被爆の実態に迫り、「消息が確認できたのは 4 人」と欄干にもたれかかる姿を「坪井」とイラストでも明記して証言を詳しく報じた[51]。先小山が「自分に間違いない」と名乗り出ていたことは書籍化でも扱っていない[52]。

今回の調査で筆者は、坪井が本当はどう思っているのかを、あらためて確かめようと 21 年 9 月 28 日付で手紙を送った。「自分だろうと思っているが正直、後ろ頭は自分では見えんよね。どう思うかいのう？」。雑談の折に坪井から直接に聞いた話や、先小山勝が 85 年に名乗り出ていたことを書いた。坪井に付き添う長女が、弟や妹にも確かめた上で横書き用紙 5 枚にびっしりと書いて 10 月 2 日付で返事を寄越してくれた。

御幸橋西詰め 1 枚目に写っていると 93 年に記事となり、「年をとった父のアゴのラインが（写真と）一致せず、私と妹は、本当にお父さん？と思っていました」という。しかし、やせ細りベッドに座る姿を横から眺めていたとき、「御幸橋のその人物と重なって見えました」。写真の人物に「頭の形がそっくり」と言った

のは身内ではないこと、先小山が名乗り出たことを知っていれば、「父は誰かが（写っていると）言った時『あれは先小山さんという人で』って言っていたと思います」とつづる。県被団協を置く広島平和会館が中区中島町にあった頃から（現在の大手町移転は 2004 年）人柄に触れてきた筆者も、「坪井ならそう言うだろうな」と受け止めた。返事は「『体験を語れるのは被爆者にしかできん。一人でも聞きたい人には伝える！』」と証言活動に取り組んだ父を「人のために生きた人生だった」と結んでいた。坪井は 10 月 24 日、96 歳で死去した。

坪井の訃報は各紙・放送で大きく報じられる。本人が御幸橋西詰め 1 枚目の大判プリントで欄干の支柱にもたれかかる男性に指さす場面を収めていた局は、全国ニュースや特集番組で紹介した。メディアが「被爆者の代表」坪井の体験を御幸橋西詰めの惨状写真からも強調するあまり、名乗り出ていた「無名の被爆者」は消し去られたと言えないだろうか。先小山は確かにその場にいた一人なのだ。

千田町 2 丁目の医師

松重 1945 年 8 月 6 日撮影の写真ネガフィルム原板 5 点が、広島市重要有形文化財に 2021 年 3 月指定された 3 月後、「奥に写っているのは義父だと思います」と、共に医師で亡き次男の妻が中国新聞社に連絡をしてきた。御幸橋西詰めの 1 枚目、中央で腰をかがめる男性の奥右に見える白いシャツ姿が義父という。「横顔や髪、けが人を見る医師としての視線。家族から見て間違いありません」[53]

松林保太郎（1890～1961 年）は、千田町 2 丁目で開業する医師だった。報道を機にあらためて確かめると「千田国民学校防空救護所」の救護部長も務めていた。広島原爆障害対策協議会が所蔵する、いわゆる「松坂義正資料」に市医師会が 58 年に実施していた「医師会と救護アンケート関係」が残っており、松林の直筆回答もあった。

爆心地から南東約 1.7 キロの医院兼自宅で被爆し、「左上膊（はく）部に外傷」を負った後の「行動」についてこう書いている。「御幸橋西詰めで直ちに救護を開始し、その後、青崎（南区）、奥海田（海田町）、矢賀国民学校（東区）などの各救護所で救護を行い、さらに日本医療団矢賀病院に半年勤務し、市民の保健と被爆者の救護に従った」

松林は、詳しい体験記も残していた。原対協の『広島原爆医療史』（61 年発行）で編集委員会代表を担った松坂義正へ死去前年の 60 年 12 月 30 日付で送っていた。岩見屋町（中区幟町）で被爆した松坂は、背負われて向かった東警察署（同銀山町）で自院の看護師 3 人と当日から救護に当たった。表題がない体験記は、県医師会が 70 年に出した『原爆日記』第 I 集に収められ、故人に代わって松坂が前書き・後書きを添えている。

松林は、救護資材がある千田国民学校が倒壊炎上しているため、向かったのは千田派出所。「かねてからもし千田国民学校に不慮の災難があった場合は、御幸橋の西詰め交番所の空（あき）地に罹災者が集まるようにと、町内会に連絡しておいた」。左肘上の外傷部には自身で包帯を巻き、妻と看護師との 3 人で向かう。医院からは宇品線に沿って南に 600 メートル足らず。

「直ちにここを仮救護所として、平素から防空用カバンに入れていた資材をつ

かってできるだけの手当を施した。距離と時間の関係上か、はじめは神経症が多かったように思う。ネオカンファー（強心剤）の注射をどんどん施すうちに、外傷者も多く避難してくるようになり…」「かくて正午前後であったかと思う、騎馬軍人（憲兵か）がきて『火災の危険が迫ってきたからすぐ待避せよ』と言うので、負傷者と共に大河方面へ避難する」。仁保町丹那（南区）の知人宅で休息をとり夕方に戻ったとみられる。「御幸橋の上に重傷者が沢山ねころんでいたが、翌七日には皆死んでいた／かくて自分の家屋（千田町二丁目）も焦土と化しているのを確認した」

松林がいう「神経症」は、目立った外傷はないが興奮状態にあった人たちだろう。御幸橋 1 枚目を高精細化画像でみると、皮膚も無残に焼かれた人たちにとどまらず一見無傷の姿も写る。2 枚目には日傘を差した女性が千田派出所前に立つ。全壊全焼する爆心地の半径約 2 キロ外から、何が起きたのかと駆けつけてきた近隣住民かもしれない。私たちが写真で見ているのは、御幸橋で続く地獄絵のような世界の始まりの一コマなのである。

健在の元女子学徒

今年 92 歳となる。竹内（旧姓松林）節子は、結婚後も国家公務員を続けて 1 男 1 女を育て、定年後は茶道を教える。夫をみとり「今は気ままに暮らしていますよ」と笑みを浮かべた。実は筆者は竹内の長男と同じ中・高校で一緒だった。息子との関係もあって中区の自宅で面会に応じ、原爆資料館による「被爆者証言ビデオ」の収録にも至った（2022 年 1 月に収録）。

しかし、その前に、被爆体験を人前で話したり、手記を書いたりする気にはなれないと念押した。「やはり思い出したくない。言い尽くせても今の人たちに分かりますかね？」。それでも御幸橋西詰め 2 枚目のプリントを手にすると、「阪本さんの左隣は確かに私です」と語った。1931 年 12 月 25 日生まれである [54]。

広島女子商業 2 年生だった松林節子は、爆心地から南東約 1.6 キロ、千田町 1 丁目の広島貯金支局 2 階で被爆した。「出勤簿か何かに判子を押そうと思ったら体が突然ドーンと押されて真っ暗、みんなの後をついて外に出たら電車通りの家々が将棋倒しのように倒れていました」。誰彼なしに宇品線路面電車の通り沿いに鷹野橋へ向かった。眼球がぶら下がったり、皮膚がずるむげになったりした人が近づいて来るのを見て、足は南に転じた。

「怖いとか、悲しいとか、感情は出てきません。とにかく逃げるので一生懸命でした」

一緒に逃げた河内（旧姓・阪本）光子とは舟入国民学校（中区）からの同級生だった。駄菓子を売っていた阪本宅に遊びに行ったこともあるという。河内は広島工業専門学校や修道中を回ったと語っていたが、竹内は迂回をせず電車通り沿いに御幸橋へ一緒に向かった、と記憶する。「阪本さんのお父さん（儀

転校した、広島市女に通っていた頃の竹内（旧姓松林）節子㊨＝本人提供

三郎）がなぜいるのか分からなかったけれど、お父さんの指導で逃げたと思います。子どもの足でしたからね、橋に着いたのは10時にはなっていたでしょう」。阪本の父は東千田町の仕事先で被爆し、長女の光子を捜して現れた。

「御幸橋には座り込んでいる人がもういっぱいいましたね。私は何をしているのだろうとのぞいてみた。それがこの写真です」と2枚目を説明する。会う前は「見たいと思わない」と話していた写真が呼び起こしたのか、語りたくない記憶も明かした。「御幸橋より川土手にいた時間の方が長かったですね。一緒に連れて行ってくれという少年がいて、あの子はどうなったのか…罪の意識が今もあります」

両親と住む舟入川口町（中区）へとにかく戻りたかった。元安川と太田川（本川）を阪本親子と渡った。河内は晩年に始めた証言活動で小舟にも乗ったというが、竹内は潮が引くのを待ってどちらも歩き渡ったという。「カニが足に触ったのを覚えています。私は逃げる間ずっとはだしだったんでしょうね」。避難行動を共にしても記憶はそれぞれに違う。鮮烈な体験の記憶を沈み込ませていても、語り始めると細部も疎かにしなかった。

戻れたのは夕方。自宅は屋根が吹き飛び、イチジク畑に蚊帳を吊って寝た。「阪本さん親子も一緒でした」。終戦を迎えると急性放射線障害に見舞われた。「鼻からの出血が毎日止まらない。それでも毒が体から出たのがよかった。私が助かったのはそれしか考えられません」。母の親族が住む石内村（佐伯区）で過ごし、自宅近くの市立第一高女に編入した。

河内を一貫して「阪本さん」と呼んだ。聞けば、戦後は一度も会ったことがなく共通の知人を通じて消息だけは互いに知っていたという。では、竹内は、御幸橋2枚目に自身も写っていることはいつ、どのように知ったのだろうか。河内が「三角襟のセーラー服は私です」と名乗り出た73年の「返還被爆資料展」がきっかけ。「週刊誌もすごく来ました。写真を見て自分だと思ったけれど、『知りません、私は違います』と答えました」。竹内が、河内の左隣は自分だと判断した決め手は、やはり着衣からだった。

「私は上着は白の国民服、下は木綿の着物を縫い直したズボンを履いて（貯金支局に）出ていました」。被爆直後の自身の背中が写るプリントに視線をじっと落とし、こう続けた。「生き延びているのが不思議な気がしますよ」

「8月6日」ネガの戦後

松重は1945年8月6日を撮影しただけではない。被爆当日の写真ネガフィルム（6×6センチ判）5点を、敗戦に続く米軍主導の占領統治という、かつてない動乱期に守り残した。でなければ今日ネガは現存していなかった。軍所属のカメラマンが撮った、原爆の惨禍を直後に記録したネガは、敗戦を機に命令でほとんどが焼却されている。残ったのは個々人の意志からである。軍報道班員でもあった松重の撮影翌日の足取りからをたどる。

やけどを負った姪を自転車の荷台に乗せて翌8月7日、翠町（南区西翠町）を離れた。松重の妹がいた府中町から、そして呉市まで付き添い、2歳の長女や両親の疎開先である愛媛県・大三島へ向かった。三次市在住の長女は、被爆者健康手帳によると「8月9日」の入市被爆。松重もそのころ広島へ戻ったとみられる。

中国新聞は本社員の 3 分の 1 に当たる計 114 人が死去するが、動ける社員は温品村（東区）の疎開工場へ出ていく[55]。牧場を借りて輪転機を牛舎に疎開させていた。暗室は横穴式防空壕だった[56]。

松重は撮影の半月後にネガを疎開工場で現像する。「設備があるわけでないし、折り（まま）からの月明かりを利用しておこなった。仮眠テントのそばを流れる石清水で水洗いし、近くの木の枝にぶらさげての乾燥であった」[57]。雑誌『世界』に載った 2000 年インタビューでは、「秋風をかんじる頃、六日に撮った五枚のフィルムを切りはなし、一枚ずつ手製の保存袋に入れたのです」「私の写真は社内でももう知られていて、一〇月半ばでしたか、米国調査団が社にやってきた」時に「例の写真も見せてあげた」と答えている[58]。

米太平洋軍顧問医アシュレイ・オーターソンや東京帝国大教授都築正男らによる日米合同調査団である。広島班は 10 月 12 日に入った。欄干の影がアスファルト橋上にくっきりと残る万代橋に案内して、自身はガラス乾板で撮った。このネガも現存している。

占領下の掲載

「8 月 6 日」撮影の 1・2 枚目、御幸橋西詰めの惨状写真が、中国新聞が別会社で発行した『夕刊ひろしま』が 1946 年 7 月 6 日付 2 面で「世紀の記録写真」の主見出しを付けて初公開したのは既に述べた。脇見出しは「米誌が全世界へ紹介」。記事にはこうある。

「先日マ司令部直属映画班のカメラマンが天然色映画撮影のため来広した際、この写真が米誌に掲載され、カメラマンは死んだことになつてゐると聞かされてビツクリしたほどで、同米国カメラマンはこれを米誌『ライフ』に版権一万ドルで掲載したいと希望したが承諾しなかつた」。また、1 面掲載の AP・共同電によるビキニ環礁での米軍原爆実験の報にも触れていた。最高司令官ダグラス・マッカーサーの映画班とは米国戦略爆撃調査団の撮影隊である。広島へ 46 年 3 月に入り、がれきが広がる中での市民の暮らしや、市役所での遺骨引き渡し、輪転機が回る中国新聞本社などをカラー映像で収めた[59]。

しかし、御幸橋で市民の惨状を撮った写真をこの時期に掲載した米誌は今に至るも確認されていない。世界的なグラフ誌『ライフ』が、「原爆さく裂直後の写真」を「米国初公開」と 7 頁・14 枚にわたり特集掲載するのは、GHQ 占領統治が明けた年の 52 年 9 月 29 日号である。広島は、松重撮影の御幸橋西詰めの 2 枚目を「さく裂 10 分後、ヨシト・マツシゲが撮った〝生ける屍〟現像ネガは市郊外の小川で洗った」とのキャプションを付けて冒頭で扱い、5 枚目は全 1 頁を充て、朝日新聞大阪本社写真部員で「8 月 9 日」に入った宮武甫（1914～85 年）が撮った傷だらけの母子などを載せた。長崎は、西部軍報道班員で福岡から「8 月 10 日」に入った山端庸介（1917～66 年）の写真である。

「米誌が全世界へ紹介」は、広島地区の新聞社は事後検閲だったとはいえ、それをかいくぐろうとする理由付けでもあっただろう。苦肉の策ともいえる見出しやエピソードを添えて掲載した『夕刊ひろしま』46 年 7 月 6 日付だが、「写真に伴う記事の一部は不穏」「違反」とみなされる。そして、松重と「整理部記者田

島賢祐」が、CCD 第 3 地区検閲局広島分局に呼び出されたのだ。松重が御幸橋 1・2 枚目を掲載構図で焼き直して提出していたのを確認したのは、「変遷していた『撮影時間』」で既に述べた。自らも原爆体験を持つ堀場清子の精緻な調べがあったからだ。

しかし、堀場の著書『禁じられた原爆体験』を基に、この「田島賢祐」が占領明けの 52 年に出た『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』を編集した－とする大学発の論考も近年出てきた。本当なのか。占領期研究を深める専門家のためにも確認できたことを紹介する。

結論から記せば、「田島賢祐」は『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』の編集者とは断定できない。同書あとがきや奥付はそもそも「田島賢裕」である。松重が同じ読みとみられる「賢裕」を「賢祐」と堀場に伝えた可能性もある[60]。今回、中国新聞社に照会すると、編集局整理部から『夕刊ひろしま』へ 46 年 5 月 31 日付で異動した、読みは「たじま」記者が確かにいた。辞令原簿は「多嶋質祐」である。ただ、それ以降の人事記録は残っていない。

米軍が投じた原爆の惨禍を占領期に扱うことは、いわばタブーでもあった。『夕刊ひろしま』は発刊の辞に「勤労大衆の力によって育てられる新聞」とうたい、中国新聞社からの出向者（31 人）は組合活動の急進派が多く、労働争議も激しかった。社の人事記録に残っていない、争議から 49 年に「夕刊ひろしま新聞社」を解雇された 10 人や、翌 50 年の朝鮮戦争で GHQ が指示した「レッド・パージ」で中国新聞社を追放された 21 人の中にも、「多嶋質祐」「田島賢祐」「田島賢裕」の名前は見当たらない[61]。

「田島賢祐」を 52 年写真集の編集者として「かれの原爆への取り組みは本物だったのである」とみたり、それも参考に別の研究者が「中国新聞社を退社していたあの田島賢裕」が 52 年の写真集の共同編集者となり、「今度は実際に米誌『LIFE』に松重の写真を掲載して世界に紹介する仲介役を果たした」と決めつけたりするのは、勇み足だろう[62]。典拠とする『禁じられた原爆体験』は、「田島賢祐」が 52 年写真集の編集者とは全く記していない。

松重「8 月 6 日」撮影の写真は占領下、『夕刊ひろしま』以外でも公表されている。広島市や広島商工会議所などによる「広島平和協会」が 49 年に発行した「ヒロシマフォトアルバム」だ[63]。英語版も作った。御幸橋西詰め 1 枚目や、佐々木雄一郎（1917～80 年）が 45 年 8 月下旬に撮った爆心地の島病院跡の写真など 24 点を収録。市長浜井信三の「原子戦争の惨害を経験した。私達廣島市民は世界の人々が廣島を回顧することによつて再び同様な惨禍を繰返さないやうに心から祈念する」の呼びかけや、米国北部バプテスト連盟が提唱した「ノーモアヒロシマズ」への賛同、最終ページに「広島市戦災記録」を盛り込んでいる。

さらに朝鮮戦争が 50 年 6 月 25 日に勃発する直前、共産党機関紙『アカハタ』の中国総局が発行した『平和戦線』同 6 月 9 日付で使われる。「再び原子爆弾を繰返すな　全愛国者は平和戦線へ！」の見出しが付く「主張」や、峠三吉の詩「八月六日」が載る紙面には、6 枚の写真が載っている。御幸橋 1 枚目や、中国新聞社写真部の山本儀江（1911～98 年）と谷川長次（1924～2002 年）が復員後の 45 年 11 月に共同で撮った廃虚の組み写真の 1 枚、山端庸介が「8 月 10 日」に撮影した長崎原爆の代表的な 1 枚となる「おにぎりを持つ母と子」など。いずれも撮

影者・提供者の名前はない。米軍が投じた原爆の惨禍を捉えた写真は、占領下にあっても共産党関係者らを通じて水面下で出回っていたことがうかがえる。

GHQ による検閲は 49 年 10 月 31 日の CCD 廃止でひとまず終了するが、朝鮮戦争下の「レッド・パージ」というむき出しの圧力が報道機関を襲った。報道のくびきと自己規制が解けるのは、対日講和条約が 52 年 4 月 28 日に発効した主権回復からである。

「原爆被害の初公開」と表紙に刷り増刷 4 回で 70 万部にも上ったという『アサヒグラフ』52 年 8 月 6 日号[64]、松重撮影写真を収録した『原子爆弾第 1 号ヒロシマの写真記録』や、岩波写真文庫『広島－戦争と都市』が出た[65]。日本での反響ぶりも紹介して『ライフ』同年 9 月 29 日号は「検閲なし」と広島・長崎の壊滅直後の写真を特集したのである[66]。

原爆記録写真の保存・活用

松重「8 月 6 日」撮影のネガは機材も乏しい疎開工場先での現像だったため、経年とともに傷みが避けらなくなる。松重は、『科学朝日』の取材で長崎から広島にも入った松本栄一（1915～2004 年）や、日本映画社の原爆記録映画スチール担当で広島へ入った写真家菊池俊吉（1916～90 年）と林重男（1918～2002 年）らと 1977 年、東京で記者会見して、ネガの「永久保存」を訴え、国や広島、長崎市に「資料センター」の設置を求めた。

翌 78 年には、地元で岸田貢宜らと原爆記録写真の保存を呼び掛け、「広島原爆被災撮影者の会」の初会合を開く[67]。宇品町にあった陸軍船舶司令部や船舶練習部、県警察部の元写真班員、元学徒ら…。会は撮影者 20 人（うち遺族 7 人）が寄せた未発表を含む計 285 枚を収録した写真集『広島壊滅のとき』を 81 年発行。2000 部（頒布価 2000 円）を作り、収益金 30 万円を原爆病院に寄付した。収集プリントは広島市が設けた平和文化センターに託し、「原爆被災の実態の広報」「核兵器の廃絶への意識高揚」を図るため無償使用を承諾する[68]。撮影者らが呼びかけて原爆記録写真の公的な保存と活用が被爆地で始まったのである。

しかし、松重は、保管してきたネガ 5 点のうち御幸橋西詰め 1・2 枚目のネガをめぐって、想像もしなかった「著作権確認等請求訴訟」で被告とされた。中国軍管区司令部総動員班長だった横浜市の会社顧問が、御幸橋上で写真を撮ったのは自分だとして 94 年 9 月 19 日、松重を相手取って広島地裁に提訴。ネガを引き渡せと求めてきたのだ。同地裁は 97 年 6 月 27 日、「原告の供述の証拠価値を否定せざるを得ない」と訴えを退けた判決を言い渡す。原告は広島高裁に控訴したが 98 年 6 月に棄却。最高裁が上告申し立てを不受理とする決定が出るまでには、一方的な訴訟に巻き込まれて 4 年の歳月を費やさなくてはならなかった[69]。自らが撮影して残したネガを守るために弁護士報酬も要った[70]。

松重は、「8 月 6 日」撮影ネガの保存と写真の活用から 98 年 10 月 22 日、ネガ 5 点を中国新聞社へ譲渡した[71]。「広島原爆被災撮影者の会」代表として平和文化センターへ提供していた自身撮影の写真 19 枚についても、2004 年 12 月 10 日に編集局と、続いて編集局は同 27 日に原爆資料館と「撮影写真の活用に係る覚書」を交わす。会が 81 年にセンターと結んでいた「申し合わせ」の趣旨を尊重し、「松

重美人撮影／中国新聞社所蔵」のクレジットを明記して資料館による展示・調査研究などの無償使用を承諾した[72]。覚書は「原爆犠牲者の尊い犠牲を後世に伝え、核兵器のない世界を築くため」、貴重な写真を報道機関が占有するのではなく被爆地の共有資料・財産として生かそうとの考えから。自らが被爆した未曾有の事態の中で写真を撮り残した松重の願いでもあった。

松重「8月6日」撮影ネガ5点は今、文化庁が所管する国立映画アーカイブ相模原分館（神奈川県相模原市）のフィルム保存庫（温度10度、相対湿度40%）に収められている。2021年3月26日に広島市重要有形文化財（歴史資料）に指定されたことから、中国新聞社は同年10月8日、写真原版の収集・保存に取り組む日本写真保存センター（2006年設立）に寄託し、センターを通じて相模原分館へ入庫となった。

22年2月10日には、原子雲や炎上する市街地を陸軍船舶練習部（南区宇品東）から撮影した木村権一（1905～1973年）のネガ（6×6センチ判）6点や、原子雲を学徒動員先の陸軍兵器補給廠（南区霞）から最も至近距離で収めた深田敏夫（1928～2009年）のネガ（3×4センチ判）4点が、原爆資料館から同センターへの保存業務委託を通じて相模原分館に入った[73]。木村の遺族と深田は「広島原爆被災撮影者の会」に写真を提供し、ネガを後に資料館へ寄贈した。

これで、松重、木村、深田が撮影し、それぞれが守り抜いた「1945年8月6日撮影」ネガの現存15点は、すべて国立機関のフィルム保存庫で保存されることになった。

広島原爆を記録した歴史的なネガの保存が大切なことは言うまでもない。さらに重要なことがある。

御幸橋西詰めの惨状写真一つみても、助かった一人ひとりの体験は重く、遺族の悲しみは深い。言い尽くせぬ原爆の惨禍が刻み込まれていた。知られていない証言や記録、撮影者の苦闘が潜んでいた。

原爆で人間はどうなったのか、核時代の幕開けは世界に何をもたらし続いているのか。「無言の証言者」でもある一連の写真から知る、考えを深める。原爆資料館にとどまらず、被爆地ヒロシマからの発信や継承を担う各機関・市民は、貴重な写真資料が持つ意味をさらに読み取り、次世代に世界に絶え間なく働きかける。二度と撮ることがあってはならない原爆記録写真を生かすことである。

おわりに

本稿を閉じるに当たって、松重が1981年12月8日、広島市で開かれた「軍縮と安全保障に関する独立委員会」(通称パルメ委員会)で発した言葉を紹介したい。

「私が写した5枚の写真や、現在残っている数千枚の原爆写真でも本当の原爆の恐ろしさを語ることはできない」

原爆の惨禍を撮った者たちの共通の思いだろう。だからこそ、原爆記録写真を読み取ることはヒロシマの務めであり、未来を築く営為でもあるはずだ。

脚注

1　原民喜「碑銘」『定本原民喜全集Ⅲ』（青土社、1978年）37頁。

[2] 西本雅実「ヒロシマの記録－原爆写真の撮影者たち」中国新聞 2007 年 8 月 14 日付。「原爆記録写真～埋もれた史実を検証する」『広島平和記念資料館資料調査研究会研究報告』第 4 号（2008 年）。撮影者一覧はその後の判明分を含めて『爆心地の写真 1945-1952』（photographers' gallery、2014 年）38-50 頁に収録。

[3] 松重は 2005 年 1 月 16 日、急性腎不全のため広島市中区の病院で死去した。92 歳。

[4] 理髪店は松重が被爆した同じ場所でおいが続けている。長女は三次市で健在。

[5] 爆心地からの正確な距離を竹﨑嘉彦（地理学）の協力で計測すると 2833 メートルである。

[6] 松重美人「八月六日の朝」梅野彪・田島賢裕編『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』（朝日出版、1952 年）86-88 頁。聞き手が証言をまとめた可能性があるが、「筆者」とあるものは後年も手記として扱う。

[7] 松重が撮影に使った「マミヤシックス」は残っていない。銀塩カメラ収集家で 1940 年発売からのマミヤシックスを所蔵する広島市在住の菅原博から説明・文献を受けた。

[8] 松重の中国新聞入社前「昭和十八年一月」履歴書が残る。既刊書籍は誤認もあり、長女の同意を得て引く。1913 年 1 月 2 日生まれ、32 年呉港中（呉港高）を卒業。名古屋市の商事会社に勤め 35 年依願退社して広島へ戻り、父の船舶物品売買業に従事。41 年 1 月芸備日日新聞（中国新聞の姉妹紙・呉新聞が 40 年合併）入社、芸備が閉じた 41 年 9 月退社。再び「家業ニ従事現在ニ至ル」。兵役は「乙種」。毛筆で記している。

[9] 松重美人「あるカメラマンの記憶－1945 年 8 月 6 日」『世界』1963 年 10 月号（岩波書店）201 頁。米英ソ核停条約の交渉開始や第 9 回原水爆禁止世界大会の分裂から特集を組み、『ヒロシマ・ノート』（同、1965 年）となる大江健三郎「広島一九六三年夏」などと掲載。

[10] 松重美人「陸軍報道班員ヒロシマ日記」『丸』1970 年 9 月号（潮書房）77 頁。

[11] 松重の死去を受けた、全国紙の長文追悼記は「がれきから掘り出した愛機『マミヤシックス』を手に市中心部の司令部へ走った。撮ったのは、わずかに御幸橋での二枚と、全壊した自宅などの三枚」としている。

[12] 前掲「八月六日の朝」87 頁。

[13] 広島平和文化センターが 1985 年 8 月 29 日に開いた「広島原爆被災写真撮影者による証言」座談会には、地元在住 6 人と県外 2 人が出席し、ビデオテープで収録。86 年度開始の「被爆者証言ビデオ」の先駆けとなった。証言は「反核・写真運動」編『原爆を撮った男たち』（草の根出版会、1987 年）にも収められている。

[14] 広島原爆被災撮影者の会（代表・松重美人）編・発行『広島壊滅のとき－被爆カメラマン写真集』（1981 年）。B6 判 157 頁。2000 部を発行。

[15] 前掲 135 頁は西消防署皆実出張所を「木造の 3 階建て」とするが、広島市編・発行『広島原爆戦災誌』第 1 巻総説編（1971 年）114 頁によると「木造二階建て」だった。

[16] 前掲「あるカメラマンの記憶」203 頁。

[17] 松重美人「涙でうるんだファインダー」中国新聞労働組合編『消えたペン－新聞労働者の8月6日』（汐文社、1988年）221-222頁。原爆死没社員73遺族への聞き取りを収録した同書の編さんに当たった元書記長によると、松重は直筆原稿を寄せてきた。

[18] 松重美人『なみだのファインダー』（ぎょうせい、2003年）20頁。ほかにも本人の記述とはみられない誤りが散見される。「長男」を疎開させ（19頁）、妻の名は「スエミ」（19頁から）、履歴では「1944年中国軍管区司令部報道班員」（60頁）とするが、長男は戦後の1948年10月生まれ、妻はスミヱ、同司令部の設置は45年6月である。

[19] 広島地方裁判所「平成6年（ワ）第1362号」。元中国軍管区司令部総動員班長が御幸橋上で写真を撮ったのは自分だとして1994年に提訴し、同地裁は97年6月27日原告の訴えを退けた。判決文に被告となった松重の撮影をめぐる供述が記されている。

[20] 中国新聞社企画局に所属していた山田精三が水分峡で撮った原子雲も載せている。中国新聞社史編纂委員会『中国新聞八十年史』（中国新聞社、1972年）184-185頁によると、『夕刊ひろしま』は1946年6月1日創刊。政府による新聞用紙の割り当てから3万部でスタートし、中国新聞社から31人が出向。50年10月1日『夕刊中国新聞』と題字を改めた。

[21] 堀場清子『禁じられた原爆体験』（岩波書店、1995年）64頁。1930年生まれの堀場は、医師の祖父がいた現安佐南区に疎開し、避難してきた被災者の救護に当たっていた。

[22] 前掲「涙でうるんだファインダー」222頁。

[23] 広島大原爆放射線医科学研究所助教久保田明子（アーカイブズ学）の協力を得た。

[24] 「ヒロシマ二十年」を手掛けた平岡敬（1991～98年広島市長）は、「松重さんがネガを持っているのは編集局では知られていたが、被爆の実態を深くとらえる企画がそれまでなくて載せる機会がなかった。松重さんと新聞社との関係も微妙だった」と振り返った。

[25] 仁科記念財団編『原子爆弾－広島・長崎の写真と記録』（光風社書店、1973年）。

[26] 前掲『広島壊滅のとき－被爆カメラマン写真集』を基に、松重は85年に80枚を収録した普及版『被爆の遺言－被災カメラマン写真集』を、96年には英文併記版も発行した。

[27] 飯島宗一・相原秀次編『写真集原爆をみつめる－1945年広島・長崎』（岩波書店、1981年）

[28] 東京都写真美術館主催「核－半減期」（1995年9月21日～11月10日）。松重ら広島・長崎の直後を撮った7人と、戦後に「被爆」をとらえた東松照明ら5人の写真を展示した。

[29] 中国新聞社と広島市は2001年2月7日付で「ヒロシマ被爆資料等写真の保存・活用に係る覚書」を締結。原爆の惨禍からの歩みを撮ったネガフィルム2802点を原爆資料館と共同でデータベース化した。中国新聞2004年3月22日付。

[30] 広島テレビ制作「閃光いまも」『NNNドキュメント'73』1973年8月5日放送。横浜市にある放送ライブラリーが番組を収蔵し、原爆資料館でオンライン視

聴ができる。

31 高橋昭博・NHK 取材班・土田ヒロミ『きみはヒロシマをみたか広島原爆資料館』（日本放送出版協会、1982 年）96、100 頁。

32 河内光子が 1995 年に書いた体験記は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が収蔵・公開。「被爆体験記集」38 巻 415 頁。

33 沓木良之「真如の月やどる」旧制広島市立中学校同窓会編『鎮魂』（旧制広島市立中学校同窓会・旧制広島市立中学校原爆死没者遺族会、1977 年）27-29 頁。

34 戸籍記載内容は、広島・埼玉県在住の孫から得た。

35 中国新聞 1968 年 8 月 23 日付番組覧によると、「動員学徒を悼む」座談会は NHK 総合午後 1 時 5 分から 20 分間の放送。

36 中国新聞 1973 年 6 月 15 日付。「ヒロシマ・ナガサキ返還被爆資料展」に伴い、写真ゆかりの人を紹介する 10 回連載「よみがえる『あの日』」第 1 回。藤田徳夫が罹災証明書を書く写真説明は「御幸橋西詰めで、正午過ぎ」としている。

37 大手町（中区）にあった西警察署は壊滅し、署長松本佐四郎は本署で原爆死した。

38 座談会の速記全文は広島原爆障害対策協議会（1953 年設立）が所蔵する「松坂義正資料」に含まれている。2021 年 11 月 2 日閲覧許可を得た。

39 前掲『なみだのファインダー』27 頁。

40 「思い出の千田町一丁目－〝街と住民〟」広島市立千田小学校編『千田小ものがたり』（千田郷土資料編纂委員会、1977 年）116 頁。

41 広島県警友会編・発行『原爆回想録－四十年目の検証』（1989 年）240-241 頁。同書には「宇品署巡査」とあるが、同会を通じて広島県警察本部に照会すると藤川は当時、巡査部長だった。千田派出所は 66 年 4 月 1 日鷹野橋派出所に統合、解体となる。

42 前掲『原子爆弾』は写真「4」収録の御幸橋西詰め 2 枚目の説明で、食用油による応急手当ての始まりは「1 人の巡査（後に須沢巡査部長と判明）」としたが、宇品署長須沢良隆の勘違いとみられる。

43 広島県警察史編修委員会『新編広島県警察史』（広島県警察連絡協議会、1954 年）672、676 頁。

44 前掲『原爆回想録』231-232 頁。

45 中国新聞 1972 年 11 月 12 日付。

46 「あの日と私」中国新聞 1965 年 7 月 25 日付。

47 先小山の長兄が営む「田中屋」は広島商工会議所編・発行『広島商工人名録』（1941 年）459 頁に経営者の名前入りで記載されている。

48 広島市 1969～76 年度「原爆被災全体像調査事業」による「世帯復元」地図。

49 「未来を語り続けて－被爆教師の体験談」広島市立翠町中学校 PTA 編・発行『かけはし』PTA25 周年記念誌別冊（1975 年）18 頁。

50 中国新聞 2021 年 2 月 20 日付。河内光子の半生を聞き取った書籍は、住友銀行広島支店の壁に貼られた収容者名簿を見る市民らの写真を「松重美人撮影家族提供」として載せているが（29 頁）、陸軍船舶司令部写真班員だった川原四儀（1922～72 年）の撮影である。松重が編集に当たった『広島壊滅のとき』は川原四儀を明記して掲載している（18 頁）。

[51] NHKスペシャル『きのこ雲の下で何が起きていたのか』2015年8月6日放送。

[52] NHKスペシャル取材班『原爆死の真実－きのこ雲の下で起きていたこと』（岩波書店、2017年）。

[53] 中国新聞2021年6月21日付。

[54] 被爆70年史編修研究会『広島市被爆70年史』（広島市、2018年）の映像編DVDが収める「10人の証言集」にある竹内節子の生年テロップ「1932年6月」は誤り。

[55] 中国新聞社編・発行『1945原爆と中国新聞』（2012年）15、31-32頁。

[56] 日本新聞公社『日本新聞報』1945年10月2日付。

[57] 川西恒夫「被爆広島の写真記録者たち」広島市編・発行『広島原爆戦災誌』第5巻資料編（1971）985頁。市公文書館が整理を進める「原爆戦災誌編さん資料」には、松重が提出していた直筆原稿400字3枚が残っていた。

[58] 白井久夫「被爆の遺言－写真家・松重美人の歳月」『世界』2000年9月号36-37頁（岩波書店）。筆者は元NHK番組制作者。『幻の声－NHK広島8月6日』（岩波書店、1992年）も著している。

[59] 中国新聞ヒロシマ50年取材班『検証ヒロシマ1945-1995』（中国新聞社 1995年）308頁。カラー映像は、黒澤明デビュー作『姿三四郎』を手掛けた三村明が撮影した。

[60] 前掲『消えたペン』222頁。「その時の整理記者田島賢裕記者と私が出頭した」と「賢裕」と記している。

[61] 広島県地方労働委員会事務局編『広島県地方労働委員会十年史』（1956年）65-70頁。日本新聞協会『新聞協会報』1950年8月10日付。

[62] 中国新聞1953年8月6日付は、軍属で「宇品の船舶兵団の情報班」にいた男性が自身撮影の写真を『ライフ』に提供したと紹介。男性の名は『原爆第1号ヒロシマの写真記録』にも協力者として載るが、船舶司令部写真班員だった川原四儀は元同僚の尾糠政美らと68年7月11日、広島市役所で所蔵の25枚を公表した際、「資料館などにある写真は複写されたもの」と言い、島根県に住んでいた尾糠は2005年7月10日の筆者取材に、班員8人が写るプリントで各自の名前を挙げ、男性は「徴用で来ていた人でカメラマンではない。この人が写したことになっているのはおかしい」と証言した。

[63] 佐々木雄一郎編『ヒロシマフォトアルバム』（広島平和協会、1949年）。

[64] 朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史　昭和戦後編』（朝日新聞社、1994年）155頁。『アサヒグラフ』1952年8月6日号は、撮影者名は記していないが、船舶司令部写真班員だった尾糠政美（1921～2011年）が45年8月7日似島で撮った全身やけどの兵士や女性を冒頭に掲載している。

[65] 岩波写真文庫『広島－戦争と都市』（1952年）は、「御幸橋西詰」の2枚と罹災証明書を書く男性（写真説明なし）の3枚を掲載。被爆7年後の広島は長野重一が撮影。

[66] 前掲『きのこ雲の下で何が起きていたのか』は、松重撮影の御幸橋西詰め写真は「7年間人目に触れることがなく『ライフ』がスクープした」と紹介。番組を見た広島の被爆者でもあるノンフィクション作家関千枝子は、『夕刊ひろしま』1946年7月6日付が初出であることをNHK広報部門に指摘したや

りとりを含め、被爆作家中山士朗との『ヒロシマ往復書簡』第Ⅲ集（西田書店、2017 年）で論じている。108、114-120 頁。関は 2021 年死去、中山は 22 年に死去した。

67 広島原爆被災撮影者の会は 1978 年 9 月 14 日、広島 YMCA で第 1 回会合を開き、12 人が出席。同席した宇吹暁（当時、広島大原爆放射能医学研究所助手）による手書きメモが、サイト「ヒロシマ遺文」に 2018 年 1 月 22 日アップされている。

68 「広島原爆被災撮影者の会」と広島平和文化センター1981 年 10 月 20 日付「広島原爆被災写真の使用についての申し合わせ」。

69 最高裁は 1998 年 11 月 13 日までに原告の上告を「理由がない」と不受理を決定した。中国新聞同 11 月 14 日付。

70 松重を支援しようと後輩の写真部員らが呼びかけて編集局でカンパが集められた。

71 松重は「8 月 6 日」撮影ネガ 5 点を 1987 年 10 月 6 日、当時の中国新聞社編集局長に保存を委託。桐の箱にネガ袋ごと収めて本社金庫で保管されていた。

72 広島平和文化センターが原爆資料館を窓口として第 3 者へ提供していた松重 1945 年 8 月 6 日撮影写真や、45 年秋から職務で撮った写真は中国新聞社の帰属であることを互いに認め、外部への提供は新聞社が判断することを盛り込んでいる。

73 日本写真家協会編『令和 3 年度文化庁「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」報告書』（2022 年）12-13、15 頁。木村権一の所属を「陸軍船舶司令部」としているが「陸軍船舶練習部」である。原爆資料館は、林重男の遺族が 2007 年に寄贈したネガの一部も日本写真保存センターを通じて国立映画アーカイブ相模原分館へ入庫している。

広島原爆の写真撮影者

2023 年 10 月末現在西本雅実・下村真理作成

市民

撮影者（当時の職務）（注 1）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
山田　精三＊（広島三中生徒・中国新聞社企画局勤務）	8 月 6 日	4（注 2）	ネガは残っていないが、中国新聞社や資料館がプリント各 1 枚を保存	爆心地から北東約 6 キロ、府中町の水分峡で友人と散策中、閃（せん）光に続く爆発音で身を伏せ、起き上がると持参したカメラを松林越しに向けた。原爆のさく裂約 2 分後とみられ、地上から最も早く捉えた原子雲の写真となる。中国新聞別会社が発行した「夕刊ひろしま」46 年 7 月 6 日付で初掲載。28 年生まれで健在
松重　三男＊（広島県職員・レントゲン技師）	8 月 6 日	4	資料館がプリントを保存	安佐郡古市町（安佐南区）の自宅から避難した、爆心地から北に約 7 キロの神田橋から暗箱カメラで原子雲を 2 枚を撮り、正午ごろ、火炎に覆われる市内を収めた。被災者を乗せて可部町（安佐北区）方面に向かうトラックも自宅 2 階から撮った。ガラス乾板で撮ったプリントを 71 年発行の『広島原爆戦災誌』で公表した。89 年に 78 歳で死去
深田　敏夫＊（崇徳中学徒）	8 月 6 日、秋	6	資料館がネガ 4 コマ、プリントを保存	卒業後も動員が続いていた陸軍兵器補給廠（南区の広島大霞キャンパス）で朝礼が終わり、建物に入ろうとして吹き飛ばされた。2 階に駆け上がって窓から、さく裂 20 分前後の原子雲 4 枚をズボンの後ろポケットに入れていたベビーパールで連続撮影。爆心地から南東約 2.6 キロ、最も至近距離から捉えた原子雲となった。2009 年に 80 歳で死去
北村　久夫（筆製造業）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	爆心地から南東約 13 キロ、熊野町の自宅兼作業場に近い榊山神社辺りから撮影。原子雲の下部は手前の山で見えないが、上部がくっきりと写る。さく裂約 20 分後とみられる。翌 7 日には警防団として入市し、犠牲者の収容作業に当たったという。88 年に 64 歳で死去。遺族が 2004 年資料館へ寄贈
織田　吾郎（農業・食糧増産指導）	8 月 6 日	3	資料館がプリント 2 枚を保存	爆心地から北東約 40 キロ、本村（安芸高田市）の自宅で、異様な雲を見て、愛用の二眼レフカメラで撮影。半年後、コメと交換して現像液を入手して写真プリントにした。1 枚は散逸したが、さく烈約 15 分後の光景を中国新聞 57 年 8 月 5 日付で、約 20 分後のキャビネ判 1 枚も 86 年 8 月 3 日付で公開。99 年に 86 歳で死去。遺族が 2023 年 1 月資料館へ寄贈
鴉田　藤太郎＊（傷痍軍人広島療養所勤務）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	北東約 25 キロ、現在の東広島市にあった陸軍傷痍（しょうい）軍人広島療養所から見えた原子雲を撮影。午後 2 時ごろ救援に向かい、東警察署（中区銀山町）で収容者の名前を書き残す。78 年に 60 歳で死去
石井　治三	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	約 22 キロの呉市阿賀、自宅近くの裏山から約 30 分後に撮影。遺族が 88 年に寄贈
波田　達郎（広島一中学徒）	8 月 6 日	1	資料館がプリントを保存	爆心地から約 4.2 キロ、現在の南区東本浦町の自宅庭から原子雲を撮影。中国新聞 70 年 8 月 5 日付で「波田千里さん撮影」として掲載されたが、撮影者は、一中卒業後も続いていた東洋工業への動員が解除となり自宅にいた長男達郎だった。23 年 10 月に名乗り出て経緯を証言、紙面で使われた複写プリントの画像を資料館へ寄贈。29 年生まれで健在
榎本　隆清（たかきよ）（写真館経営）	8 月 6 日	1	プリントは本川小、資料館が保存	山崎与三郎（76 年に 86 歳で死去）が 53 年本川小へ寄贈していた資料から「安佐郡緑井村より」の説明書きを添えた原子雲の写真が 2013 年に見つかる。23 年夏、同じ構図の写真が毎日新聞大阪本社版 46 年 8 月 5 日付で「古市町榎本隆吉氏撮影」として載っていたのが浮かび上がり、研屋町（中区紙屋町）で榎本写真館を営み、安佐郡安村（安佐南区）に疎開していた榎本隆清と判明。爆心地から約 10 キロ内外から撮っていた。58 年に 58 歳で死去
不明	8 月 6 日	1	プリントは本川小、資料館が保存	「広島原爆戦災誌」第 3 巻（71 年刊）に「海田市町（海田町）の陸軍需品廠から撮影」として収録。山崎与三郎の提供で、撮影者は軍関係とされる。山崎は戦前は本川小で教え、被爆後は「千田書房」を開いて原爆被災資料の収集に努めた。安佐郡内から撮った原子雲の複写とともに 2013 年、同校への寄贈資料を整理する中で鮮明なプリントが見つかった
不明	8 月 6 日	1		広島流川教会（中区鉄砲町）が 75 年夏に開いた資料展で、被爆牧師谷本清（86 年に 77 歳で死去）が信者からの提供という原子雲の写真を紹介し、中国新聞同年 7 月 30 日付で「爆心地より西南、五日市町（佐伯区）方面から写したのではないか」と地元写真家の見解を付けて載った。プリントは資料館を含めて残っていない
川本　俊雄＊（県警察部写真班）	8 月 8 日～	85	資料館がプリントを保存	5 日に西条町（現東広島市）へ出張し、6 日午後に入市。8 日、爆心地西 410 メートルの本川国民学校校庭での火葬を残す。敗戦後は、市中心部の惨状をはじめ、比治山国民学校（南区）に設けられた引き取り手のいない子どもをみた「迷子収容所」を収める。68 年に 66 歳で死去

佐々木　雄一郎（写真家）	8 月 18 日～	182	資料館が 2007 年プリントの寄託を受け電子化、ネガを保存	東京のオリエンタル写真学校を経て内閣情報部発行の『写真週報』の撮影に当たっていたが、原爆で母や兄家族、姉、妹ら 13 人を奪われて帰郷。肉親が住んでいた場所や、原爆ドームをいち早く撮る。49 年『ヒロシマフォトアルバム』を編さん。70 年『写真記録　ヒロシマ 25 年』を出版。被爆地の実態を撮り続け、80 年に 63 歳で死去
松岡　泰三（東洋工業＝現マツダ＝勤務）	8 月中旬～	7	資料館がプリントを保存	的場町（南区）で被爆。比治山から見た市中心部や、国泰寺（中区）の倒れた大クスノキなどを撮影した。74 年に始まった市民による「原爆の絵」に、京橋川一帯の惨状や親子 3 人のやけどを描いた絵を寄せている。95 年に 86 歳で死去
森本　太一＊（写真業）	11 月頃	5	資料館がプリントを保存	戦前に東京のオリエンタル写真学校を卒業し、広島で写真店を開業していた。8 月 17 日に復員。家族の疎開先にあった愛用のライカを携え、知人の消息を求めて市内を歩き回り、県産業奨励館（原爆ドーム）など爆心地一帯の惨状を収めた。73 年に撮影写真の一部を公表。78 年に 61 歳で死去
北　勲＊（広島管区気象台技術主任）	8 月末～9 月末	5	広島市江波山気象館がネガ 4 コマを保存。資料館がプリント 5 枚を保存	爆心地から約 3.7 キロ、江波山（中区）の気象台で被爆した。調査を兼ねて、北側の欄干が落ちた相生橋や、倒壊寸前の鶴羽根神社（東区）などを撮影。写真集「広島壊滅のとき」（81 年刊）で「40 枚くらい撮影して歩いた」と振り返っている。市江波山気象館が、9 月 17 日に襲来した枕崎台風の被害も収めたネガ 17 点を保存する。2001 年に 89 歳で死去
谷原　好男（写真業）	8 月下旬～12 月末頃	35	資料館がネガ 35 コマ、プリントを保存	軍の写真現像に携わっていた福岡県から 19 日に入った。実家は白島北町（中区）にあり、変わり果てた広島城址の中国軍管区司令部や第二陸軍病院、陸軍幼年学校などを残した。戦後は北九州市で写真材料店を営み、74 年資料館にネガを寄贈。84 年に 80 歳で死去
井上　直通（なおみち）（帝国銀行員・広島支店勤務）	8 月 30 日～9 月上旬	10	資料館がプリントを保存	爆心地から約 360 メートル、鉄筋 2 階建て支店の内部や金庫、全景を 6 枚収め、周囲の様子も撮影。本店から被害状況の報告を求められ、市郊外の知人宅に預けていたカメラを使い、フィルムは取引先に頼み込み入手した。東白島町（中区）の自宅で被爆し、同僚ら計 32 人が犠牲に。05 年に 92 歳で死去。壁の一部を使った広島アンデルセン新店舗が 2020 年再開
佐渡　次郎（海軍から復員）	8 月 18 日頃	2	資料館がネガを保存	岩手県から戻り、的場町（南区）・荒神橋西詰めから北西に向かって自宅の焼け跡や、北東の広島駅方面を撮影。戦後に住んだ牛田東（東区）の自宅で古いネガを整理し、セミ判（6 × 4.5 センチ）2 点を 31 年ぶりに見つけて資料館に寄贈
平松　高市（広島工専助教授）	8 月中旬	16	資料館がプリントを保存	己斐（西区）の下宿先で被爆。爆心地南東約 2.1 キロで全半壊した広島工専（現在は千田公園）の様子、全壊全焼の際となった一帯を撮影。88 年に 92 歳で死去。遺族が 95 年ネガを見つける
黒石　勝＊（広島赤十字病院レントゲン技手）	10 月	3	資料館がプリントを保存	家族が疎開していた福山市から 7 日に戻り、収容者らを手当て。後に初代原爆病院長となる重藤文男さん（82 年死去）の指示で同僚と主に患者を撮影。90 年に 77 歳で死去
岸本　吉太＊（写真館経営）	10 月～	43	資料館がガラス乾板、ネガ、プリントを保存	原爆で長女（8 歳）を失いカメラを手にする気になれなかったが、中国配電（現・中国電力）の依頼で市内一円の電気施設被害を撮影。爆心地から 680 メートルの本店屋上から復興期の広島市の変遷も撮り続けた。89 年に 87 歳で死去。遺族が 2009 年資料館に寄託
林　寿麿（かずま）＊（福屋百貨店勤務）	秋	15	資料館がプリントを保存	出向した南観音町（西区）の配給会社の寮で被爆。家族疎開先の志和掘村（東広島市）から通い、8 階福屋（現存）や 4 階旧館（53 年に解体）が立つ廃墟を撮影。福屋屋上からは、11 月 5 日付で自力印刷再開直前の中国新聞社も収めた。79 年に 84 歳で死去
佐藤　盛雄（宗教者）	9 月 3 日	1	資料館がプリントを保存	河原町（中区）の金光教広島教会の焼け跡から南西方面を撮影。74 年に 59 歳で死去
平原　伝（つたえ）（中国配電＝現中国電力＝勤務）	12 月 11 日	13	資料館がネガ 12 コマ、プリント 13 枚を保存	復員して郷里にあった配電尾道営業所に復帰。サツマイモと交換してフィルム 1 本を入手して同僚と本店へ向かい、大手町（中区）から小町の本店に向かって撮影し、広島駅前や八丁堀地区の焼け跡も収めた。85 年資料館に寄贈。尾道市で健在、25 年生まれ
野田　功（つとむ）（広島陸軍被服支廠勤務）	秋～冬	5	資料館がプリントを保存	爆心地から約 2.7 キロ、被服支廠（南区出汐）の倉庫で被爆。西引御堂町（中区十日市町）に住む両親や妹、弟の家族 6 人を失う。廃虚の中の県産業奨励館（原爆ドーム）を東側から撮影している。戦後は西宮市で暮らし、2017 年に 92 歳で死去
田丸　義明	秋～冬	11	資料館がプリントを保存	大手町（中区）にあった広島瓦斯（ガス）本社ビルなどの崩壊を収めたプリントが 63 年に資料館へ。提供者は己斐町（西区）で被爆とあるが、撮影経緯は不明
中野　喜義（広島地方専売局勤務）	秋～冬	2	資料館がプリントを保存	爆心地から約 2.2 キロの皆実町（南区）の専売局や、鉄筋コンクリート造りの工場を撮影。仁保町（南区日宇那町）の自宅で被爆したという。70 年に 71 歳で死去。親族が 2006 年資料館に寄贈

根石　福司 （帽子店経営）	8月頃	3	資料館がプリントを保存	愛宕町（東区）に住み、爆風で障子が吹き飛ばされた自宅室内を収めた写真の裏には「愛宕町の家、原爆被爆状況　20・8・6」、大手町の廃虚写真には「21・6・14引伸」の直筆が残る。遺族によると、写真撮影を趣味にしていたという。79年に68歳で死去。遺族が2007年資料館に寄贈
中川　正彦 （国鉄職員・広島駅出札係）	9月	6	ネガは不明、プリントを73年に公開	蛇腹式カメラに使い古しのフィルム6コマが玖波町（大竹市）の自宅にあり、鳥居が倒れたままの旧護国神社（中区基町）などを撮影。米国からの「返還被爆資料展」が73年に旧平和記念館で開かれたことから、自宅を探して撮影写真を見つけた
中前　義美 （製材業）	9～10月	11	資料館がプリントを保存	平良村（廿日市市）から7日入市被爆し、救護活動に従事した。橋げたが落ちた本川橋など爆心地一帯の光景を撮影。88年に81歳で死去。遺族が2007年資料館に寄贈
小田　勇司 （光道国民学校2年生）	8月8日か9日～12月末	9	資料館がプリントを保存	西引御堂町（中区十日市町）の自宅庭で被爆し、母に助けられて八木村（安佐南区）に避難した。翌日から両親に連れられて妹の遺骨を捜して市内に戻り、カメラが趣味だった父から手渡されて自分でも撮ったという。本人が2008年資料館に寄贈。2016年に78歳で死去
保田　守吉 （醤油・酒造製造業）	12月頃	12	資料館がネガ9コマ、プリント12枚を保存	京橋町（南区）で「保田七兵衛商店」を営んでいた一家の3男で、草津方面（西区）へ向かう途中の己斐で被爆。自宅庭跡や周辺の廃虚を撮影していた。84年に69歳で死去。遺族が2008年、17年資料館に寄贈
中野　忠男	9～10月頃	7	資料館がプリントを保存	焼け残った福屋や中国新聞社、日本勧業銀行広島支店が並ぶだけで、人影も少ない八丁堀地区（中区）や広島駅南側の焼け跡などを撮影。92年に79歳で死去。親族が2022年資料館に寄贈

新聞・通信社

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
松重　美人（よしと）＊ （中国新聞社写真部・中国軍管区司令部報道班）	8月6日、9～11月	13	「8月6日」撮影5点を含むネガ10コマが現存。中国新聞社が所有し、計13枚のプリントは資料館も保存（注3）	翠町（南区西翠町）の自宅で被爆し、爆心地から南東約2.2キロの御幸橋西詰めで市民の惨状を収めるなどした5枚を当日に撮影した。うち2枚が中国新聞別会社発行の「夕刊ひろしま」46年7月6日付で初掲載。米軍の占領統治が明けた52年、国内の写真集2誌に続き、LIFE9月29日号が「原爆直後の写真を米国初公開」と広島・長崎の7ページ特集を組み、御幸橋の2枚目を冒頭に掲載。原爆の惨禍を知らせる代表的な1枚に。10月12日に入った日米合同調査団の求めで万代橋の欄干の影なども撮った。2005年に92歳で死去
高木　正三 （朝日新聞西部本社写真部）	8月8日前後	2	ネガ、プリントは残っていない	朝日新聞西部本社版10日付で「優しい声で戦災者を励ます女子報道班員」「焼跡で足並揃（そろ）へて軍官民の復興相談会（広島市内にて高木特派員撮影）」の説明を付けた2枚が載る。報道統制のもと原爆直後の広島を扱った初めての報道写真となった。「広島にて岸田特派員発」と小倉市（北九州市）から7日に入った西部本社記者岸田栄次郎の記事も10日付にあり、9日までに撮ったとみられる。79年に64歳で死去
国平　幸男（ゆきお） （毎日新聞大阪本社写真部）	8月9日	40	ネガとプリントは同社が保存	9日、社会部記者の西尾彪夫と広島に入り、トンボ返り。臨時県庁が7日に置かれた東警察署へ救援物資が運び込まれる光景などの2枚が、11日付大阪版で「新型爆弾刎（は）ね返した廣島市　国防写真隊員撮影」の説明で載る。掲載を願った廃虚の組み写真は軍の検閲から許されなかった。右腕負傷の少女を撮った写真が当時10歳の藤井幸子（ゆきこ）さん（77年に42歳で死去）と2017年遺族の証言から判明し、原爆資料館は19年の全面リニューアル展示に伴い本館入り口に掲げた。09年に92歳で死去
渡辺　喜四郎 （毎日新聞西部本社山口支局長）	8月上旬	4	プリント2枚を西部本社が保存	毎日新聞西部本社版12日付に「廣島市にて－渡邊山口支局長撮影」の写真2枚が掲載。救援のために「県下各地から出動の警防団員」が下柳町（中区銀山町）の東警察署前を歩く光景や、「若人の勢揃（ぞろ）ひ」を撮っている。『毎日新聞西部本社五十年史』（73年刊）は、伝書バトを携えた連絡部員2人が7日昼すぎ己斐駅に着き、惨禍の情報を通信紙に書いて放し、ハトは門司市（北九州市）の本社に夕方戻ったという。52年49歳で死去
宮武　甫（はじめ） （朝日新聞大阪本社写真部）	8月9～12日	119	ネガとプリントは同社が保存	中部軍管区司令部宣伝工作隊として9日夕に入り、12日に戻った。爆風で落橋した本川橋などの写真が、大阪版20日付から7回連載の「原子爆弾　浅田博士に聴く」（大阪帝国大教授浅田常三郎）で使われた。広島赤十字病院で治療を受ける少年らを撮った5枚は「正視に堪へぬこの残虐さ」の見出しで9月4日付に掲載され、ネガは占領期に自身が守った。「原爆被害の初公開」と表紙に刷ったアサヒグラフ52年8月6日号で、熱線を浴びた女性の写真も収録され、発行は70万部に上った。85年に71歳で死去

水野　十三 （中部日本新聞＝現中日新聞社＝写真部）	8 月 9 日	72	ネガとプリントとも焼却	名古屋本社から9日に社会部記者と入った。フィルム2本を使って、県産業奨励館（原爆ドーム）や焼け残ったバスなどを撮ったという。14 日付に「壊れ残つた土蔵と壕／廣島市にて水野特派員撮影」の 1 枚が掲載。ネガは敗戦後に本社ボイラー室で燃やした、と生前に証言している。05 年に 90 歳で死去
中田　左都男（さつお） （同盟通信大阪支社編集部）	8 月 10～11 日	37 （うち地図 1 枚）	共同通信社がオリジナルネガ 11 コマ、残りは複写ネガを保存。資料館がプリント 30 枚を保存	大阪調査団員として 10 日に入ったことが、大阪帝国大教授浅田常三郎のメモに残る。同盟配信の中国新聞社屋上から東南方向に収めた廃虚の写真は、終戦直後 19 日付の朝日、毎日の各東京・大阪本社版、読売報知（読売）、中部日本（中日）から各紙が掲載。山陽線神田川鉄橋で転覆した貨物列車の現場写真は 20 日付朝日東京版で載る。眼球が飛び出した死者の写真は、米通信社 ACME（UPI の前身）が 9 月 2 日に配信していた。46 年に後身の共同通信社を退職し、大阪市内で輸入洋品店などを営んだ。94 年に 74 歳で死去
佐伯　敬（たかし） （同写真部）	8 月上旬～17 日			広島駅ホームの一団を捉えた同盟写真を共同通信社が 2007 年に配信すると、「45 年 8 月 17 日」と判明。広海軍工廠（呉市）の動員解除で帰りの列車を待つ旧制三次中 4 年生の一行と、写っていた東京在住 OB が名乗り出た。同盟写真を検証する共同 OB の調べで、大阪支社写真部の佐伯敬も広島に向かっていたことが浮上。広島大所蔵の「米病理学研究所返還資料」に含まれる鮮明な同盟写真をデジタル化すると、東南方向の廃虚はパノラマ 5 枚構成の 1 枚であり、本職・佐伯撮影の可能性が高いという。48 年に読売新聞社に移籍。97 年に 82 歳で死去（注 4）
八田　国吉 （朝日新聞西部本社写真部）	9 月 3 日	1	プリントは同社が保存	昭和天皇が派遣した侍従永積寅彦が 9 月 3 日に廃虚の広島を視察する写真が、西部本社版 5 日付、大阪版 7 日で掲載された。前者は撮影が「八田」と名前が記され見出しは「聖恩に戦災者咸泣」、後者は撮影者名がなく「原子爆弾による死傷二十七萬名」だった。12 月に長崎医科大の残骸片付けも撮っていた。05 年に 88 歳で死去
新見　達郎 （毎日新聞大阪本社写真部）	9 月 10～11 日	7	ネガとプリントは同社が保存	「〝ピカドン〟の悲劇超えて」の見出しで、相生橋から県産業奨励館を撮った写真が大阪本社版 9 月 13 日付で載る。50 年代に呼称が定着する「原爆ドーム」の初掲載。『社会部記者　大毎社会部七十年史』（71 年刊）は、米軍調査団の広島入りから社会部記者を特派して「国平カメラマン」が同行したというが、この写真をはじめ、マンハッタン管区調査団が 10 日に大野陸軍病院（廿日市市）で収容患者を診る光景も撮影していた。広島出身。1914 年生まれで 48 年死去
山上　圓太郎（えんたろう） （同）	9 月 9～11 日	36	ネガとプリントは同社が保存	爆心地から約 360 メートルの帝国銀行広島支店の内部（広島アンデルセンが被爆外壁の一部を保存）、「下柳町内会」（中区銀山町）の幟旗が傍らに見えるバラック、米軍マンハッタン管区調査団の医学班を率いたスタフォード・ウォレンや、同行の東京帝国大学教授都築正男らによる陸軍病院宇品分院（南区宇品東）での調査などを撮影していた。07 年生まれ。西部本社に異動し 48 年末に依願退職
松本　栄一 （朝日新聞社出版局写真課） （注 5）	9 月 18～25 日	157	プリントは同社が保存	『科学朝日』の取材で東京からライカに 100 フィートのフィルム 2 缶を携え、列車で 4 日間かけて 8 月 25 日長崎に着き、9 月 15 日まで撮影。枕崎台風が広島を襲った翌 18 日に入り、25 日まで建造物の被害を中心に収めた。掲載は米軍の検閲で不許可となりネガ提出を命じられ、焼き捨てたことにして、講和条約の発効まで隠し通した。縮景園（中区）で「戦死者之墓」の立て札を撮った写真の公開を機に 87 年、64 人分の遺骨確認となる。04 年に 89 歳で死去
松尾　英世 （朝日新聞大阪本社写真部）	9 月上旬～	38	プリントは同社が保存	「〝焦都廣島から〟／松尾特派員撮影」のハエ取り紙を天井に付けた路面電車内などの 2 枚が大阪本社版 9 月 21 日付で載った。植物の生育などの計 4 枚に加え、大阪本社 2023 年調査から別の撮影プリントの現存が判明。9 月 3 日から大野陸軍病院（廿日市市）を拠点として牛田国民学校（東区）にも診療班を置いた京都帝国大原爆災害総合研究調査班による解剖や血液検査を収めていた。17 日襲来の枕崎台風による土石流は病院中央部を壊滅させ、班員 11 人も犠牲となった。82 年に 65 歳で死去
富重　安雄 （朝日新聞西部本社写真部）	12 月	3	ネガとプリントは同社が保存	妻の兄一家 7 人が死去した長崎へ 8 月 23 日に入り、浦上天主堂や臨時救護所となった新興善国民学校などを撮影した。広島にも入り、小町（中区）一帯の廃虚をカメラに収めた。現存 3 枚のうち 2 カットに本人が写る。97 年に 89 歳で死去
山本　儀江＊ （中国新聞社写真部）	11 月	3	中国新聞社、資料館がプリント 3 枚を保存	2 度目の召集により、西観音町（西区）で被爆して 9 月 1 日に復員。大手町（中区）に残った煙突をシルエット撮影。さらに上流川町（中区胡町）にあった中国ビル（中国新聞社新館）から南方向と南西方面・本通一帯の廃虚を、谷川とキャビネ判組み立て暗箱を使って撮影した。98 年に 86 歳で死去
谷川　長次＊ （同）	同			45 年 1 月に召集され、終戦により広島へ戻り社に復帰。鉄製の窓枠も吹き飛ばされた中国ビル 4 階から、写真部先輩の山本と廃虚を共同で撮影した。2002 年に 78 歳で死去

伊久（これひさ）　茂視 （朝日新聞社広島支局）	12 月～	4	プリントは同社が保存	45 年 1 月までビルマ（ミャンマー）で陸軍の情報班員として戦闘撮影に当たり、西部本社を経て 11 月から広島支局に駐在。焼け残った小町（中区）の中国配電（中国電力）本店に入っていた仮支局で寝泊まりしながら、駅前の闇市やバラック建設なども撮影した。2004 年に 81 歳で死去

軍所属

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
木村　権一＊ （陸軍船舶練習部）	8 月 6 日～	18	ネガ 6 コマ、プリント 18 枚を資料館が保存	爆心地から南東約 4.2 キロの船舶練習部（南区宇品東 5 丁目）で軍馬厩舎の移転作業中に被爆し、さく裂約 15 分後の原子雲 3 枚に続き、炎上する市街地を 3 枚組みで撮影。8 月 30 日に入った東京帝国大教授都築正男の指示により、第一陸軍病院宇品分院で初期放射線障害にも見舞われた患者らも収めた。73 年 3 月に 67 歳で死去。同年 5 月の米陸軍病理学研究所（AFIP）からの「返還資料」には木村撮影と同じ構図の患者カラー写真 2 枚が含まれているが、モノクロを着色・複写したとみられる。遺族がネガ 6 点を 06 年資料館に寄贈
尾木（おき）　正己＊ （呉海軍工廠火工部設計係）	8 月 6 日～20 日	22	資料館がプリントを保存	呉海軍工廠（呉市若葉町の海上保安大学校）から、さく裂約 40 分後の原子雲を火工部にあったライカで撮影する。翌 7 日からは広島に救援隊で入り、デルタ一帯も収めた。朝日新聞大阪本社版 9 月 13 日付、東京本社版 16 日付が地上から撮った原子雲を紙面で初掲載したが、尾木撮影の写真をトリミングしたものである。東京から 8 月 8 日に海軍調査団で入った技術中佐の北川徹三が鮮明なオリジナル・プリント（15 × 10 センチ）を残していた。遺族が 04 年呉市に寄贈し、大和ミュージアムが所蔵する。2007 年に 93 歳で死去
小平（こだいら）　信彦 （陸軍野戦船舶本廠・技術大尉）	8 月 6 日	5	資料館がプリントを保存	東京帝国大工学部を卒業し、召集により広島沖合の金輪島にあった野戦船舶本廠（暁第 6140 部隊）修理部第 2 工場長を務めていた。爆心地から南東約 6 キロ。兵器の装備状況を記録する名目で医務室から入手していたレントゲンフィルムがあり、高さ 8000 メートルに上っていた原子雲を撮影。7 日未明、上陸船艇 3 艘（そう）で吉島（中区）に上陸して救援活動を続け、12 日に帰島。戦後は気象レーダーの研究者となった。2019 年に 100 歳で死去
斎藤　実	8 月 6 日	1		入院先の呉海軍病院から撮った原子雲が、産経新聞 57 年 7 月 31 日付で掲載された
「橋本　勤次郎」 （海軍少尉）	8 月 6 日	1		「特攻基地のカメラが捉へた爆発の一瞬」と中国新聞 46 年 8 月 1 日付が、倉橋島（呉市音戸町）にあった特殊潜航艇「蛟竜」基地から「橋本勤次郎元海軍少尉が撮影した」という原子雲の写真を掲載。しかし、53 年発行「元海軍士官名簿」、特潜艇隊員らを網羅する 88 年発行の「特潜会名簿」にも「橋本勤次郎」の名は残っていない。
岸田　貢宜（みつぎ）＊ （中国軍管区司令部報道班）	8 月 7 日～12 日	30	資料館がネガ 30 コマを保存	出張先の吉田町（安芸高田市）から 6 日昼に入市被爆。翌 7 日に爆心地から約 480 メートルの自宅跡（中区本通）でくすぶる中心街をいち早く撮ったほか、船舶司令部が直後から指揮した救援活動を紙屋町や横川町などで収め、焼け残った福屋からは東方面のパノラマ写真も撮影。戦後は本通で写真館を営み、原爆写真の保存を松重美人らと呼び掛けた。88 年に 72 歳で死去。ネガは孫が 2018 年資料館に寄贈。「戦闘司令所ヲ広島市廳ニ推進…」（8 月 8 日発の船防作命第 44 号）を伝える市役所南側のテント建て光景を収めたネガも残っていた
尾糠（おぬか）　政美（まさみ）＊ （陸軍船舶司令部写真班）	8 月 7 日～	20	資料館がプリント 19 枚を保存。広島原爆障害対策協議会がプリント 12 枚を保存	宇品凱旋館（南区宇品海岸 3 丁目）の前庭で被爆。翌 7 日に沖合の似島で軍医の指示を受け、焼けただれた兵士や女性らを次々と収める。以降も比治山や段原（南区）などの臨時救護所や広島赤十字病院などを回り、キャビネ暗箱やマミヤシックスを使って撮影。皆実町（南区）に住む母マキノ（当時 60 歳）を道々捜したが見つけられなかった。戦後は郷里の島根県川本町に戻って写真館を営んだ。全身やけどの兵士の写真は、アサヒグラフ 52 年 8 月 6 日号フロントページで撮影者名なしで掲載されている。2011 年に 89 歳で死去
川原　四儀＊ （同）	8 月 9 日～	47	資料館がプリント 45 枚を保存。広島原爆障害対策協議会が 5 枚を保存	爆心地から約 4.6 キロ、船舶司令部写真班の部屋で被爆。8 日広島入りした大本営調査団に同行して 9 日から、京口門（中区八丁堀）一帯の惨状や本川左岸沿いテントに収容された兵士らを撮影。写真は、原子物理学者仁科芳雄らが「原子爆弾ナリト認ム」と 10 日に判定した素案「特殊爆弾調査資料」に添付された。さらに昭和天皇が 9 月に閲覧していた船舶司令部作成の「広島市戦災記録写真帖」（宮内公文書館所蔵、計 45 枚）に 24 枚が収録。ネガ廃棄を命じられたがプリント 23 枚を残し、68 年に公表した。写真店を営み 72 年に 49 歳で死去

陸軍船舶司令部写真班	8 月 7 日～	43	資料館がプリント 26 枚を保存。広島原爆障害対策協議会が 34 枚を保存。宮内公文書館所蔵の写真帖に 5 枚	東京から 8 月 14 日に入った陸軍軍医学校教官の御園生圭輔(戦後は原子力安全委員長などを務め 95 年に 82 歳で死去）が、陸軍運輸部の使用済みザラ紙に「極秘」「船舶軍医部」の押印がある「広島市戦災記録写真」を 73 年、広島原爆障害対策協議会に寄贈。計 52 枚（うち 2 枚は同一カット）が貼られていた。尾糠、川原、木村の撮影が判明したカットを除き、初代資料館長長岡省吾の遺族が 2015 年に寄託した未公開プリントや宮内公文書館所蔵の「広島市戦災記録写真帖」と照らすと、写真班撮影分として 43 枚が現存している
大橋　完造（陸軍憲兵学校軍医＝東京中野区）	8 月 11～17 日	6	資料館がネガ 6 コマ、プリントを保存	憲兵学校で7日に「広島壊滅」との話を聞き、願いを出して10日、仁保町（南区）の実家に着く。父の診療所にフィルムがあるのを見つけ、翌日から関連部隊などを回って救護に努めながら、鷹匠町（中区本川町）の廃虚、光道国民学校（45 年 11 月廃校）などの惨状を撮影した。戦後は仁保で内科・小児科医院を続け、2003 年に 88 歳で死去
藤田　明孝（中国憲兵隊司令部）	10 月頃	7	資料館がプリントを保存	終戦 2 カ月後、命令により二葉の里（東区）近くの山中に「米軍勇士之墓」と白木に書いた十字架を建て、宇品町（南区）にも墓標があるのを知り、写真に収めていた。瀬戸内沿岸部上空で迎撃されて捕虜となり、中国憲兵隊司令部（中区基町）で被爆死した米兵らの名簿が外務省外交史料館にあるのが判明した翌 78 年、写真の存在を公表した。当時は徳山市（周南市）在住の 61 歳

調査団（注 6）

撮影者（当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
呉鎮守府調査団（団長・呉海軍工廠火工部長三井再男）海軍調査団（団長・艦政本部安井保門）	8 月 8 日～	24（うち地図 1 枚）	大和ミュージアムが保存	呉鎮は 6 日夕に先遣隊を送り、艦政本部で原爆開発「F 号」研究に当たった三井大佐が率いる 12 人が 7 日調査を開始。海軍大臣米内光政が送った安井大佐らの調査団 10 人は同日空路で岩国着。8 日、天守閣が崩れた広島城跡で合流し、さく裂地点を求めた。調査写真は 70 年、三井（89 年に 87 歳で死去）が相生橋などの惨状 16 枚を公表。呉鎮調査団の神津幸直が計 24 枚（うち 1 枚は手書き地図）を、海軍調査団の北川徹三（83 年に 76 歳で死去）が 15 枚を保存。両者の遺族が呉市に寄贈し大和ミュージアムが所蔵している
大阪調査団（団長・大阪帝国大教授浅田常三郎）	8 月 10～11 日	17	資料館がプリントを保存	中部軍司令部の要請から、浅田を団長に海軍薬剤少佐や報道班員で同盟通信大阪支社の中田左都男ら 6 人で 9 日夜に大阪を列車で出発し、呉海軍病院の車で 10 日広島デルタに入った。ガイガー・ミュラー計数管で放射能を測定して回った基町（中区）などの壊滅状況や、頭部やけどの男性、呉鎮守府調査団と海軍調査団が回収していたラジオゾンデ（爆発測定無線装置）を撮影。団員だった大阪海軍病院副官の山田正明(当時 32 歳の軍医）が写真を貼ったアルバムを残し、東京在住の遺族が 2014 年資料館に寄贈
山崎　文男（東京・理化学研究所員）	8 月 30 日～9 月 5 日	7	「相原秀二資料」として資料館がプリントを保存	理化学研究所で中性子研究に取り組み、「陸軍省広島戦災再調査班」員として放射能測定に当たる中で撮影。81 年に 74 歳で死去。広島・長崎の壊滅状況を 45 年 10 月に収めた原爆記録映画の製作者、相原秀次（本名は秀二、2008 年に 98 歳で死去）が 05 年資料館に寄せた「相原資料」には、広島の爆心地一帯を山崎が 9 月 4 日に撮ったプリントも残る。45 年 9 月 1 日からの直筆フィールドノートは遺族が 05 年資料館に寄贈
菅（すげ）　義夫（東京帝国大助教授）	10 月 5 日～(8～10日長崎) 14 日に再び広島	92	資料館がプリントを保存	文部省学術研究会議「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に物理学者として参加。10 月 5 日、東千田町（中区）の広島文理科大から調査を始め、爆風でずれた元安橋の石柱などを調べ、爆心の位置を推定。助手らが撮影を担った写真を、調査報告集が 12 月 11 日付で印刷中止となったため独自に保管した（発行は 53 年に）。委員会の吉澤武男所蔵や原爆記録映画製作班で日本映画社の三木茂撮影分を除くと、ダブりがないのは 92 枚となる。85 年に 83 歳で死去。遺族が 2003 年調査ノートや印刷中止の通知書なども資料館に寄贈
吉澤　武男（東京帝国大助教授）	10 月	77	資料館がプリントを保存	「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に参加し、鉄塔や電柱などの被害状況を調査し、車両の破壊や爆風でゆがんだ広島赤十字病院の窓枠などの写真を広島 77 枚、長崎 48 枚にわたってアルバムにまとめた。53 年発行の「原子爆弾災害調査報告集」収録の機械金属科会機械班の報告論文には 5 枚(うち長崎 1 枚）を掲載している。73 年に 64 歳で死去。アルバムは遺族が 2017 年に資料館へ寄贈

渡辺　武男 （東京帝国大教授）	10月11～13日 （15～19日長崎）	54	ネガは東京大が保存	専門は鉱床学。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の地学班として10月8日広島に着き、海田市町（海田町）の日本製鋼報国寮を宿舎とする。熱線による影の方向と傾きを測定し、溶けた瓦などの試料を集め、爆心地の島病院（旧細工町、中区大手町）前の路上からパノラマ写真も撮影した。15日からの長崎調査には、初代資料館長となる長岡省吾が参加。米軍が46年5月ワシントンに送った記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」（2時間44分）で「熱」の説明を監修した。86年に79歳で死去
金井　清 （東京帝国大地震研究所技師） 前田　敏雄 （同大第一工学部雇）	10月18日～11月7日	83	ネガ、プリントは資料館が保存	金井は広島市出身。入市被爆し、終戦を東警察署で知る。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」土木・建築科会の研究員、前田は同科会の助手として10月18日に着く。長崎での調査を挟み、再び広島での調査を11月8日まで続けた。金井の母校であり、焼け落ちた雑魚場町（中区国泰寺町）の広島一中講堂や、本川に架かる新大橋のアスファルトに残る欄干の影などを撮影。金井は2008年に100歳で死去。戦後は地震学会長を務めた金井と親交を結んだ研究者が遺族から託された日誌などを含む255点を18年資料館に寄贈

記録映画関係者（注7）

撮影者 （当時の職務）	撮影日	撮影枚数	ネガ、プリントの現存状態	撮影状況やその後の経緯
林　重男 （東方社カメラマン）	10月1～10日	233	ネガ、プリントは資料館が保存	日本映画社から木村伊兵衛が写真部長だった東方社へ記録映画スチル撮影の派遣要請があり、手を挙げた。「物理班」を担当。10月5日、爆心地一帯の惨状を基町（中区）の旧商工会議所4階屋上からローライフレックスを使い360度パノラマで収めた。12日からは長崎で撮影し22日帰京。米軍のネガ提出命令に、木村は印画紙などを求めて林らが焼いたプリントを提出しネガを守った。82年「反核・写真運動」をつくり保存・活用を訴えた。ネガは2000年資料館に寄託し、02年に84歳で死去。遺族が07年寄贈に切り替えた
菊池　俊吉 （東方社カメラマン）	10月1～21日	860	ネガは遺族が保存。2007年、中国新聞社と資料館が広島国際文化財団の助成を得てネガから焼いた全プリントを電子保存化	「原子爆弾災害調査研究特別委員会」に同行した記録映画製作で「医学班」のスチルを担当し、広島赤十字病院などで患者や、逓信病院そばに建てた板小屋での病理解剖などを収めた。撮影にはライカも使い、フィルムは「さくらパンF」（ASA50相当）。袋町国民学校の壁に書かれた家族の安否を尋ねる伝言板も撮影。90年に74歳で死去。写真に残る文字が98年に見つかり、旧校舎一部保存の袋町小平和資料館（中区）に至った。グラフ誌『LIVING HIROSHIMA』向けに47年8月～10月撮影のネガ2268点も2008年から電子化
田子　恒男 （東方社助手）	10月1日～下旬	23	ネガ、プリントは資料館が保存	国策の東方社に東京写真専門学校在学中から動員勤務に就いていた。学校の先輩でもあった林と9月27日東京をたち、枕崎台風の被害で尾道からは船で宇品に29日上陸。林の撮影を手助けし、海田市町の宿舎では調理も担う。11日以降は菊池に付き、自らもローライフレックスで調査研究団の様子や病理解剖の臓器も収めた。98年に73歳で死去
三木　茂 （原爆記録映画撮影者）	同	207	「相原秀二資料」として資料館が保存	溝口健二や亀井文夫作品の撮影者として戦前から名をはせ、日映が企画・製作する原爆記録映画の「土木建築班」に参加。建造物の被害状況を中心にパルボカメラで撮影に当たり、手札判の写真機でも収めていた。映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」（2時間44分）は、連合国軍総司令部（GHQ）「監修」のもとに完成し、46年5月ワシントンに送られたが、ラッシュプリントは三木が東京都世田谷区で営む現像所に隠し残った。78年に72歳で死去
山中　真男 （同）	同	20	「相原秀二資料」として資料館が保存	原爆記録映画「医学班」の撮影を担当し、スチル写真も撮った。「原爆撮影日誌」と大学ノート表紙に記し、東京を出発した9月27日からの行動を詳細に記録。広島では10月2日に撮影を始め、「この児、親子をどうか助けてやってくださいと神に祈って」「こんな仕事をしているのがいやになった」とも記す。23日海田市駅から長崎へ。78年に76歳で死去。日誌は遺族が05年資料館に寄贈した

（注1）撮影者名の横に「＊」印を付した人物は、「広島原爆被災撮影者の会」（1978年発足）の呼び掛けに応じて撮影プリントを提供し、1981年広島平和文化センターにも寄せた人たち（遺族も含む）
（注2）撮影カメラや枚数について、中国新聞が山田の証言を初めて名前入りで報じた夕刊78年10月4日付「私の原爆写真」では、ベビーパールで4枚を撮影し、残り3枚は二重写しや真っ白だったという。
（注3）松重が代表を務めた「広島原爆被災撮影者の会」は81年、遺族からを含む複製プリント285点を広島平和文化センターに提供し、資料館が保存。中国新聞社は松重45年8月6日撮影ネガなどを2022年日本写真保存センターに寄託し、国立映画アーカイブ相模原分館で保存。
（注4）沼田清「新たな原爆カメラマンが浮上」（新聞通信調査会『メディア展望』2016年9月号）、「昭和20年の同盟通信社写真部の活動」（同2023年3月号）。
（注5）松本の所属名・撮影行動は85年7月15日東京都内であった「反核・写真家のつどい」の本人証言による。
（注6）「八月六日広島空襲被害状況調査報告書概要　呉鎮機密第三九六号　呉鎮守府司令部」、北川徹三「勤務録」（次男が所蔵）、「浅田常三郎メモ」（広島県立文書館が写しを所蔵）なども参照。「原子爆弾災害調査研究特別委員会」の職務は45年9月30日作成名簿に基づく。
（注7）仁科記念財団編纂『原子爆弾』、加納竜一・水野肇『幻のフィルム』、林重男『爆心地ヒロシマに入る』なども参照。

（補記）

広島が米軍投下の原爆に見舞われた 1945 年 8 月 6 日から年末までの写真撮影者の一覧作成に当たっては、中国新聞 2007 年 8 月 14 日付「ヒロシマの記録－原爆写真の撮影者たち」に至る取材で集めた各資料や証言を基に、写真の現存が以降に分かったり、原爆資料館へ寄せられたりしたものを含めて、全面的に調べ直した。北勲の没年や木村権一の享年を間違えていたのに気づき訂正もしている。

今回の作成は、記者時代からの「宿題」を続ける一市民ライターの調べだが、顧みれば、原爆記録写真を所蔵する各機関やご遺族らの協力を得られたことが大きい。

2012 年の創刊 120 周年企画『1945 原爆と中国新聞』の取材で、本社壊滅 3 日後の「8 月 9 日付」から代行印刷を引き受けた朝日新聞、毎日新聞の両西部本社で 45 年末までの最終版を閲覧することができ、広島へ特派された記者・カメラマンの存在と掲載写真を知った。それまでは両大阪本社・東京本社版の確認にとどまっていた。

また、初代原爆資料館長だった長岡省吾が大竹市の旧宅屋根裏にも残していた膨大な資料を次男の錬二氏（2022 年に 80 歳で死去）から現地で見せていただき、15 年に寄託を受けた資料館は写真の整理・検証に当たった（17 年に寄贈）。撮影者・団体名を突き止めた成果は今回の一覧にも反映させている。

被爆 70 年、壊滅直後を収めた「昭和二十年八月六日広島市戦災写真帖」（28 ページ）が宮内庁宮内公文書館にあることも知った。2011 年施行の公文書管理法に基づき明治以降の「特定歴史公文書等」の閲覧に応じていることを安藤福平氏（元広島県立文書館副館長）に教えられ、陸軍船舶司令部写真班などによる 45 枚を電子画像で入手した。広島へ派遣された侍従永積寅彦が 1945 年 9 月 5 日に帰京して、「同日及び十四日に復命する。その際、永積は船舶司令部宇品よりの写真を供し」（『昭和天皇実録』第 9、2016 年）とあるように、昭和天皇が閲覧していた。本邦初の原爆写真集でもある。

さらに 16 年、同盟通信大阪支社写真部員だった佐伯敬が広島で撮っていたことを共同通信社 OB の沼田清氏から教示いただいた。今回、朝日新聞、毎日新聞の両社が所蔵する 45 年末までの広島原爆写真についても回答を得た。調査の趣旨を受け止めてくださった関係者らに感謝を申し上げたい。

そして、井手三千男氏（2006 年に 65 歳で死去）の取り組みを挙げたい。被爆建造物を中心に 110 万都市広島で原爆の痕跡を撮り続けた写真家は、一面廃虚の写真であっても、他の写真や各資料と突き合わせることで、撮影場所・時期などの同定に迫った。実践方法も伝授してくれた。共に薫陶を受けた原爆資料館学芸課所属、落葉裕信や菊楽忍、下村真理の各氏の惜しみない協力がなければ、この一覧は作成できなかった。

自らが被爆した市民が撮り残した写真は遺族を通じて 2023 年の今も、原爆資料館へ寄せられている。原爆記録写真を調べる作業に「終わり」はない。